
小さな少女と女性な少年

アルミ嘴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな少女と女性な少年

【Nコード】

N9597C

【作者名】

アルミ嘴

【あらすじ】

不幸体質な庶民のお嬢様と、その幼なじみで、見た目は美女な少年の話。（作者が未熟者のため、恋愛要素が少な目です。） 若干の犯罪描写・流血表現あり。ちょっとご注意ください。

小さな少女と女性な少年 プロローグ（前書き）

初投稿ですので、あまり上手くないですが、よろしくです。
ストーリーは、キャラ視点で進みます。

誰の視点かは、タイトルでわかるかと思います。

小さな少女と女性な少年 プロローグ

——天崎さんって、ちっちゃいよねえ。

そんな言葉を、小学生の頃からずっと言われ続けてきた。

他の子達よりも身体の成長が遅かった私は、いつも同級生達を見上げていた。

そんな、只でさえ小さな私は、小学六年生の秋頃、学校の階段を転げ落ちるといふ事故に遭って、134cmで身長が止まった。

∴ 134cm。大体、9〜10歳の女の子の平均身長くらい。

高校の制服を着てても、小学生と間違われてしまう。

好きな人も、いつまでも私の事を妹扱い。

——天崎さんって、ちっちゃいよなあ。

…そんなこと言われても、全然嬉しくない。

低い身長を気にしている私にとって、この言葉は棘になるばかりだし。

…でも、多分。私はこの言葉を、一生言われ続けていくんだと思う——。

* * * * *

——白金って、見た目は完璧に女だよな。

普通、こんなこと言われて腹の立たない男はいないと思う。

白金の家系の男子は大体女顔らしいが、中でも俺はずば抜けて女顔だ。

女だ、と間違われるのが嫌で、男っぽい髪型にしても仕上がりは『ボーイッシュな美少女』。

…男であることを全否定。逆効果だった。

高一の時には、男なのに、学園内での美女コンで二位だった。（一位は近所に住む二年上の夏美さんだった。）

——白金くんって、女っぽくて羨ましい。

…俺的には悲しいよ。

登場人物紹介（前書き）

ちよつと順番を間違えた気がしなくてもないけど、ここで人物紹介。

登場人物紹介

人物紹介

あまさき
天崎 冬花 ふゆか

高校一年生 ♀

身長 134 cm

血液型 O型

子どもっぽくて、ちょっと消極的な性格。

母方の祖父が英国人だったらしく、金髪・白肌。目だけは日本人らしい黒茶色。

100人中99人が認めるほどの美少女で、学校一の美少女だと噂されている。

……が、本人だけは自分の容姿が、十人並だと思っている。

成績はトップクラス。運動は事情があって出来ない。

他人の感情に対し、鋭く、相手の目を見て、大まかな感情をよめる。ただし、じいっと見られて、冬花に落ちる男性も少なくない、という事実には、本人は気付いていない。

しろがね
白金 勇希 ゆうき

高校三年生 ♂

身長 176 cm

血液型 O型

大企業の跡取り息子。外交的で、積極的な性格。放課後になると、仕事を覚えるために父の会社へ行くため、暇なし人間。しかし、休みが少ないというのに部活に入ったり、彼女をつくったりと、やや無責任なところがある。

母親が英国人なので、地毛が金髪。顔立ちは整っているが、とても女性的なので、初めて会った人は、大抵、勇希がどんな服を着ているようにも、女性と間違える。

成績はトップクラス。運動も結構出来る方。

以上、主役二人。

サブキャラ

あまさき
天崎 玲花 れいか

高校一年生 ♀

身長 176cm

血液型 A型「AO」

冬花の幼馴染みで、同じ年の従姉。冬花の兄・秋良あきひの恋人でもある。

見た目はスレンダーな美人だが、気丈な性格。時々、毒を含む辛辣な言葉を使う。冬花の恋の応援者その1。

成績はトップクラス。だが、運動音痴で、体育の時間が憂鬱。

黒瀬 くろせ 硬介 こうすけ

高校二年生 ♂

身長 186 cm

血液型 A型「AA」

天崎家のお隣さん。兄的な人。冬花の恋の応援者その2。
成績は並。運動は、すばらしくできるタイプ。

白波 しらなみ 翔太 しょうた

高校二年生 ♂

身長 173 cm

血液型 B型「BO」

黒瀬家のお向かいさん。優しい人。冬花の恋の応援者その3。
成績は上の上。運動は並。

飯田 いいた 夢菜 ゆめな

高校一年生 ♀

身長 153 cm

血液型 A型「AO」

硬介の再従兄妹 はとこ。高校に入ってから冬花と玲花の友人。

それなりに美人だが、冬花と玲花の所為であまり目立たない。

成績は上の中。運動もかなりできる。

第一話 小さな少女 告白される？（前書き）

とりあえず、一話スタート！
…いいのかな？こんなので…

第一話 小さな少女 告白される？

四月の半ばのある日、校舎裏で――

「初めて見掛けたときから好きでした！付き合ってください！」

……なんだか最近、呼び出されて告白される事が多くなってきたようないきが……。

私、天崎 冬花がこの、呼び出し告白を受け始めたのは、二週間程前。

――つまり、この学園の高等部に入学してすぐの頃からだった。

入学式で、私は外部新入生代表挨拶を頼まれていた。

頼まれたからには一生懸命やろう。

そう思って当日、それに挑んだんだけど……

* * * * *

入学式の大まかな流れは、まず、校長先生の挨拶。その後、在校生代表、つまり生徒会長の歓迎の言葉。

そして、外部新入生代表である私の挨拶、最後に内部新入生代表の挨拶、という進行だった。

生徒会長の挨拶が終わって、次は私の番。
私は緊張していた。

そして、壇上にあがってから、私は大きな失敗をした。

生徒会長は、とても身長の高い人で、2 mくらいあった。

そんな人の挨拶の後となると、当然、マイクスタンドは長く伸びたまま、マイクは非常に高い位置にあった。

134 cmの私では、背伸びして、手を伸ばしても届かないくらいに高いところに。

ひどく緊張していた私は、冷静な判断力を失っていた。
マイクスタンドの伸縮方法もわからず、焦りながらマイクにむかって手をのばし、ピョン、ピョンと跳び跳ねていた。

私は必死だったんだけど、周りの人達は、微笑ましい、と言わんばかりの緩んだ顔でこっちを見るだけで、だれも手助けはしてくれなかった。

それをみかねた教頭先生が、壇上に上がって手助けしてくれるまで二分間ものあいだ、私は、マイクと格闘していた。

* * * * *

「元々、半端ないくらいの美少女なのに、あんな愛くるしい姿見せたらどんな男でも一撃必殺！でしょうね…。」

と、従姉兼幼馴染みである玲ちゃんは冗談交じりにそう言う。

私はごく普通の顔立ちなんだけどなあ…、童顔だし…幼児体型だし…。

で、そんな普通の女の子である（筈の）私にとって、ここ最近の告白ラッシュは予想外のもので。

しかも、素直に喜べない事情もあるわけで……。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「ええーつと……ゴメンナサイ。

私には好きな人がいるのであなたとは付き合えません…。」

と、最近はどうも言い慣れたセリフを残して立ち去ろうとした…

——のだけれど。

「ちよっ、ちよつと待って!！」

と、告白してきた男の子に、腕を掴まれる。

——掴まれた？…やだ！やめて！

「！…っいやあっ！！」

とっさに、掴まれた腕を振り払う。

突然の、私の拒絶を受け、その男の子は呆然としていた。

……ああ、やつちやったあ…。

「あっ…ごめんなさい。突然触られてちょっと驚いちゃって…」

と、苦し紛れに誤魔化して、相手が呆然としているうちに、その場から逃げ出した。

—そう

私は、男性恐怖症気味なんだよね……。

第二話 小さな少女 幼馴染みにばったり遭遇（前書き）

…ああ、自分の文才の無さに泣けてくる…。
文章的におかしな所もあると思いますが、広い心で読んでいただくとありがたいです。

第二話 小さな少女 幼馴染みにばったり遭遇

「よっ。冬花。」

「…勇くん？」

教室に戻る途中、玄関前で勇くんに会った。

白金 勇希——勇くんは、私の二つ年上（七月から十二月までの間は三歳差になるけど。）の幼馴染みで、私の初恋の人。

…今も彼に恋してるんだけどもね。

だけど、自分から行動に出るほど積極的にはなれないでいる。

その理由のひとつとしては…。

今、勇くんには彼女さんがいる。

勇くんはとっても女の子っぽい外見だけど、かなりもてる。
だから、恋人がいない期間はかなり短い。

もうひとつの理由。

まあ、これが一番大きな理由なんだろうけど。

簡単に言うと、ただ、私が臆病なだけ。

大抵、今日こそは、今日こそは……、と言い訳しているうちに、勇君に新しい恋人が出来ちゃっている。

それでも、私は勇君を諦められない。

私は基本的に大体の男の人が恐怖の対象になるので、勇くん以外の男の人を好きになったことはない。

男の人あまり近寄られるとぞぞつとするし、触られると悲鳴をあげてしまう。

だから学校では、玲ちゃんが男の人を遠ざけてくれる。

「なあ、顔色悪いぞ。大丈夫か？」

私の顔を見て、驚いたように勇くんが言う。

「え！？あ、ああ、うん。大丈夫。ちょっと男の子に触られたただけだから。」

「なんかあったのか？いつも一緒にいる玲花もないし……」

「…うん。男の子に告白されたの…。
断って、帰ろうとしたんだけど、引き留められて…その時に腕を掴
まれて…」

思い出しただけで、身震いしてきた。

「そうだったのか…教室まで送ろうか？」

「ううん。一人で帰れるからいい。それに、彼女さんと待ち合わせ
をしてるんでしょう？ここにいなきゃだめじゃない。」

「…よくわかったな。」

「さっき彼女さんに会ったもの。」

そう、さっき、校舎の正面玄関に来るまでに、彼女さんに出会して
いた。

難しそうな顔をしていた彼女さんは、私の顔を見て、一瞬、微笑ん
でくれたけど、すぐにまた難しい顔をして考え込んでいた。
どうしたんだろう？彼女さん。

…でも、今はそんなことよりも。

「ねえ、勇くん。」

「ん？」

「…ちょっと無責任すぎるよ。」

私を気遣って言ってくれるのは本当にありがたいんだけど、だからって、恋人との待ち合わせをすっぱかして違う女の子と一緒にいるだなんて。

いくらやさしい彼女さんでもいい気はしないよ。

ただでさえ、勇くんが忙しくて普段の日にデートなんて出来ないんじゃないでしょうか？

その上でこんな、彼女さんへの裏切り行為をとつたら、完全に嫌われちゃうよ。」

気になっていたのは勇くんの一言。

彼女さんと待ち合わせをしてるのに、あまりにもサラッと『送ろうか？』なんて言うのは、流石にどうかと思う。

「出来ないこと、やってはいけないことを簡単に口にしたり、安請け負いしたりしちゃ駄目だよ。」

高校生になってからの勇くんは、なぜか、あれもこれもと、いろいろなことに手をつけ始めたらしい。

全部しっかりやりきるなら言うこともなかったんだけど、実際、勇くんは、勇くんのお父さんの仕事の見習い・お手伝いで手一杯で、他のほとんどの事をないがしろにしまっている。

『恋人』も例外ではなく放っておかれるから、高等部が上がってからの勇くんの恋人達は、皆、半年以上はもたなかったみたい。

勇くんの恋人になりたくてもなれない私にとって、恋人の座につく女の人がころころと変わっていると、いてもたってもいられなくなる。

だから、せめて、今の彼女さんと長く続いてもらうために。

そして、私自身の気持ちに踏ん切りをつけるために、言わずにはいられなかった。

…でも、やっぱりまずかったかな？勇くん、啞然としてるし…

「…えっと、ごめんね。ちょっとお節介だったかな。イラッとしちゃったよね。」

二つも年下の子供にこんなと言われるなんて。」

「……いや、おかげでちょっとは目が覚めた気がする。」

…無責任…だったんだな、俺。

いつもいつも彼女と別れる度に、真面目に付き合っ気がないなら、最初から安易にOKなんかしないでよ、って言われててさ。

…やっと意味がわかったよ。」

…良かったあ。怒ってないみたいだし、少しはわかってくれたみたい。

「彼女さん、大事にしないと駄目だよ。」

じゃないと、いつまでたっても私が諦めきれないから。

…結局、私は、自分のために勇くんに説教していたのかもしれない。

でも、勇くんがわかってくれたならそれで良いかな。

「じゃあ、またね。」

多分、もう彼女さんが来るだろうから、私は教室に戻ることにする。勇君の彼女さんは、悪い人じゃなさそうだけど、それでも、私は彼女さんに会いたくない。

「ああ、またな。」

という、勇くんの女子のような高めの声を背中に受けて、私は、校舎内に戻った。

第三話 女性な少年 まさかの展開？（前書き）

設定まで投稿して、本文中に名前まで出してしまったキャラたちのうち、主役の冬花と勇希しか登場させていない、という状況になってしまいました…。

まあ、徐々に出していきたいと思ってますので、気長にお待ちください。

第三話 女性な少年 まさかの展開？

初めて冬花に会ったのは、俺が小学生になった年だ。

父さんの親友、紘さんが、俺の入学祝を持ってきた日、奥さんの由美さんの足にしがみついている、金髪のちっちゃい女の子が冬花だった。

その頃の冬花は、同年の子どもと比べても圧倒的に小さかったうえに、病弱だったため、長い病院暮らしをしていて、少し前に退院したばかりだったらしい。

だから、俺と妹に遊び相手になってほしい、と思って、ついでのつれてきたと言っていた。

小さい頃の俺は、金髪の子どもなんて、自分と妹くらいしか知らなかったから、もう一人妹が出来たようで嬉しかった。

家が近所（と言っても、俺ん家がデカすぎるため、天崎家まで徒歩で20〜30分位かかるけど。）で、俺ん家の庭が広がったから、いつも一緒に遊んでいた。
冬花が小学生になる頃には、硬介や翔太、玲花も、俺達と一緒にいた。

あいつは、小学生のころから、かなり頻繁に犯罪に巻き込まれていて、常に悲しみと恐怖に飲まれているような目をしていた。

だけど、俺が慰めると、目の輝きも戻り、笑顔になってくれた。それが、俺は嬉しかった。

俺が中学生になってからは、あまり話す機会はなくなったが、それでも、あいつは俺を心のよりどころにしてくれていた。俺は、妹分として、冬花を大事に思っていた。

だから、気付かなかった。
いや、気付こうとしなかった。

見た目は子どものままでも、中身はしっかり成長しているんだということに。

それも、俺なんかよりも確かに――

「無責任すぎるよ。」

今まで、俺に一度も見せたことがない真剣な目で、そう言われた瞬間、本当に一瞬で頭が冷えた。

それは、見た目も中身も子どもっぽい、二学年も年下の幼馴染みの少女が、俺に対して、初めて大人な一面を見せた瞬間でもあった。

それは俺に、不思議な喜びを与えると同時に、俺に冷ややかな事実を教えた。

——俺は、俺が思っているほど、冬花のことを知らない。
と。

よく知っているはずの妹分が、急に、噂で聞いた程度の女の子のよう
うに思えてしまった。

それに、俺は無責任、と言われたことも考えていた。
そう言われて、初めてここ数年の俺の行動を振り返る。
そして、自分がいかに無責任かを痛感した。
無性に悔しかった。

俺は自分で気付くことができなかった。

冬花は、心配してくれた人に説教を返す、という嫌な役を、自ら買
って出てまで、俺に気付かせてくれた。

そして、そんな冬花に対して今、俺は愛しさを感じていた――

「じゃあ、またね。」

「ああ、またな。」

冬花が去ったあと、俺は色々なことを考えていた。
仕事、部活、彼女、そして、冬花に感じた愛しさ……

まさか、俺は、冬花のことが……？

…有り得るかもしれない。

さっき、普通に「送ろうか」と言ったことだって、よく考えてみれば、いつものことだ。

何かの事件に遭って塞ぎこんだ冬花を慰める時は、何時だって、他のどんな予定よりも冬花を優先してきた。

慰める時に、言葉だけじゃなく、軽く抱きしめたり、頭を撫でたりするけれども、それだって

「こうすれば冬花は落ち着くから」
という理由だけじゃなく

「俺が冬花に触っていたいから」という理由があるからだ。

…考えれば考えるほど、それが正しいような気がしてくる。

（でも、アリなのか？俺！

冬花は大事な妹分だぞ！？恋愛感情持ったまま接していいと思ってるのか！？）

…多分、この時の俺の頭の中には

『妹分な幼馴染み』妹』

という馬鹿な勘違いが定着していた。だから、本当に真剣に悩んでいた。

「いい子ねえ、あの子。貴方のことをよく見ているみたいだし。何より、見た目も中身も可愛らしいわ」

「うわあっ！？み、瑞穂！？」

すうっと、後ろから現れたのは、待ち合わせしていた彼女の瑞穂だった。

「やほお、勇希い♪瑞穂ちゃんだよおう♪」

…テンション高え…

こいつが今日、俺を呼び出した理由はなんとなく予想がつくが、このテンションの高さは異常なような気がする…

「今日、勇希を呼び出したのは他でもない……

ずばり……！

あたし達！別れましょう！！」

…随分楽しそうに言い切ったなあ……

…話の内容と場の空気が一致しないし…

…まあ、未練は無いかな…

たったの二週間だったし、友達の延長みたいな付き合いだったし。

「…で、なんで？」

一応聞いところ。ロクな理由でないような気がするけどな…。

「恋だの愛だのってあたし、よくわからないのよねえ…
だからさあ、男友達で一番仲良かった勇希と付き合えば、なんかわかるかな？」

「って思っただけで、いざ付き合ってみても、付き合う、ってなにすればいいかわからないし…」

結局、あたしには恋だの愛だのはまだ早い！って思ったのよ。」

「…どーりで、友達の延長のような付き合い方だと思ったよ。」

「…ただね、あたしの勝手に告白したのにあたしの勝手に別れるのはさすがに酷いかな、と思ってたの。」

「そしたら勇希、あの女の子といい感じっぽかったから、やっぱり別れを切り出すなら今かなあ、と」

「ちょっと決まりが悪そうに言う瑞穂。」

成程、テンション高かったのは純粹に嬉しかったからなんだな。

俺に次の相手がいれば少しでも罪悪感が薄れるから。

「まあ、よく考えもせずにOKした無責任な俺も悪いんだし。結局、俺とお前は『友達』が一番しつくりくるんだよな。お前の言う通り『恋人』はもうやめようか。」

「ええ、そうしましょう。」

と、ホッとした表情で、瑞穂はそう言った。

こうして、俺の『異性交遊最短記録』は大きく塗り替えられた。

「ところで勇希、さっきの子、入学式の日、あんたと一緒にいたけど、あたしを見て逃げていった子だよね？しかも、入学してたったの二週間で学園一の可愛い系美少女として、有名になった子だよ？」

前半は兎も角、後半は初耳だ。

「ああ。よく覚えてるな。」

* * * * *

あの日、冬花と話していたら、やはりハイテンションな瑞穂が走ってきたんだ。

「彼女さん？」

と訊かれて、

「まあな。」

と答えたら、冬花の目が、沈み込んでいるときの“あの目”になって

「あ、そうなの…。じゃあ、私は帰るね。」

と言って、冬花は瑞穂から逃げる様にして去っていった。

* * * * *

「ねえねえ、どんな関係？」

瑞穂のやつ、楽しそうに訊いてきやがったよ。

「近所に住む、二つ年下の幼馴染みだよ。
小さい頃から俺に懐いてた。」

「あら、そうだったの、それで……」
なにかを納得したように頷く瑞穂。

「それじゃ、あたしは先に教室戻るわ」
「勇希と学園一の可愛い系美少女が幼馴染み、
っていう面白い話も聞けたし、またね」

「あ、瑞穂。」

「ん？何？」

とりあえず。

「余計なお世話かもしれないけど、お前、自分を引っ張っていつてくれる男とだったらうまくいくと思うぜ。」

「!」

助言でもしてみた。

瑞穂は、普段はあの調子で、大雑把でハイテンションだけど、たまに見え隠れする“本当の”瑞穂は寂しがり屋で気が小さいからな。きつと、想ってくれる相手に引っ張られていく方が幸せになれると思っんだよな。

「あ…あはは、ありがと。またね」

「おう。またな。」

瑞穂は動揺してはいたが、いつも通りの調子で、校舎内に入っていた。

さて、俺も教室に戻ろう。

でも、本当にどうしようかなあ…。

第四話 小さな少女 友達との会話（前書き）

… 木曜日にギリギリセーフ。文のまとまりはあまり良くないけど、
なんとか木曜日に投稿できました。

第四話 小さな少女 友達との会話

「毎度毎度、ご苦労様あゝ。」

「まったく…。男子達も遠慮つてものを知らないのかしらね。というか、OKしてもらえなくても思つてるのかしら。」

まさか、自分達がふうちゃんのことを『高嶺のお姫様』って呼んでるのを忘れてるのかしら？」

教室に戻つてくると、玲ちゃんと夢ちゃんが声をかけてきた。

軽い感じで労いの言葉を言つて来たのが夢菜ちゃん（私は夢ちゃん、と呼んでいる。）で、私のことを『ふうちゃん』って呼んで、私を気遣いながらも、男子達に辛辣な言葉を投げつけたのが玲花ちゃん（私は玲ちゃん、と呼んでいる。）。

玲ちゃんとは、赤ちゃんの頃から（？）の大親友で、夢ちゃんは入学式の日に仲良くなつた友達。

「えーと、確かにOKする気はないけれども、それはちょっと言いすぎじゃない？」

それに、私が高嶺のお姫様だなんて、なにかの間違いだよ。きつと玲ちゃんの事だよ。」

絶対に玲ちゃんは、違っつて言うんだろうけど、実際、私のことじゃないと思う。玲ちゃんは長い黒髪で、背も高いし、とても綺麗な美人だけど、私は普通の顔立ちに低い身長、そして細いだけで凹凸の無い身体。『美人』や『綺麗』なんて言われたことがない。勇君に少しでも見惚れてもらえたら、と思っつて精一杯お洒落をしても、勇君の反応は至っつて普通だったし。

「…謙遜、じゃないわよね。本気で気にしてるみたいだし。」

不思議そうに、夢ちゃんが言う。事実だよ。

「多分、家庭環境が原因よ。」

「家庭環境？まさか家庭不和…」

「いや、家族仲は良いのよ、凄く。ただ」

「ただ？」

「母親と姉がものすごい美女なのよ。父親と二人の兄もかなりの美形だし。」

「…それって、『綺麗』の中で育ったから『可愛い』に気付いてない、ってこと？」

「まあ、そういう事よ。」

玲ちゃんがそう答えると、夢ちゃんは見見るうちに呆れ顔になっていく。

うーん。綺麗が云々、可愛いが云々と、話がまいちよくわからないけど、夢ちゃんの顔を見る限り、ひょっとして、馬鹿にされてる？

「玲ちゃんと夢ちゃんの言いたいことがよくわからないんだけど。」

私は話の主旨がまだ掴めない。

「つまり、冬花ちゃんはかわいい、って話なのよ。」

「嘘だあ。」

「本当よ。っていうか、男子連中、裏であたしのことを『姫守りの毒女』とか呼んでるし。」

「わたしは確か『なんとなく美人』だったかな？
なんとなく、だよ？ なんとなく。」

「これはもう嫌がらせだと思っただけど。」

夢ちゃんかわいそう。がつくりしてる。

「…あたし達にはバレてないでも思ってるんでしょうね……」

「…多分……」

「あ、そうだ。ねえ冬花ちゃん。今日、冬花ちゃんの家に行ってもいい？」

まだ、部活も始まってないし、さっき言ってた冬花ちゃんのお母さんとお姉さんに会ってみたいんだよね。」

「え？うん、いいよ。」

夢ちゃんの突然の申し入れに、ちょっとびっくりしたけど、遊びに来てくれるのは嬉しいので頷く。

「やった！ありがと。じゃあ今日も一緒に帰りましょ。」

というわけで、今日は夢ちゃんが、家に来ることになった。

人物紹介／天崎家の家族編／（前書き）

次の話を読む前に、先にここを読んでおく事をお薦めします。

人物紹介〜天崎家の家族編〜

人物紹介〜天崎家編〜

あまさき
天崎 春樹 はるき

25歳 会社員

身長 185cm

血液型 AB型

天崎家の長男。既婚者。

優しく真面目で、何でも出来る次期社長候補。
人望も厚い。

あまさき
天崎 清奈 せいな

25歳 会社員

身長 163cm

血液型 O型

春樹の妻。旧姓は木下。

現在、妊娠のため、産休中。

義母にあたる由美の出産予定日よりも、自分の出産予定日のほうが
早いのを気にしているらしい。

春樹と同じく、優しくて真面目。

あまさき
天崎 秋良 あきら

25歳 会社員

身長 185cm

血液型 AB型

天崎家の次男。春樹とは双子。

玲花の恋人。

よく玲花をからかうが、大抵、返り討ちに遭う。
次期社長候補だが、社長になる気はないらしい。

あまさき
天崎 夏美 なつみ

19歳 大学生

身長 178cm

血液型 A型

天崎家の長女。顔・スタイル共に完璧な美女。

少々スコンの気あり。冬花と玲花が大好きである。

あまさき
天崎 紘 こう

50歳 会社会長

身長 186cm

血液型 A型

天崎家のお父さん。

兄（玲花の父）と二人で会社を立ち上げ、急成長させた実力者。

人を見る目が優れていて、勘もいい。経営者としての素質は十分。
今では会社は、一流企業に成長し、様々な業界から期待と注目を集
めている。

波乱の人生を歩んできたため、抜け目のない人物。

外見は三十代くらい。年のわりに若々しい。

あまごき
天崎 由美

自称43歳 洋菓子喫茶店長

身長 167cm

血液型 B型

紘の妻。旧姓は柴田。

外見は二十代にしか見えない自称43歳の美女。
現在妊娠中。

日本人と英人のハーフ。

個人経営の小さな洋菓子喫茶を営んでいる。

冬花のつくるケーキが職人級に美味いからという理由で、たまにつ
くらせて店に並べている。

顔立ちは冬花に似ている。（冬花は自分の容姿に自信がないため、
似てないと思い込んでいる。）

第五話 微毒な少女 家族紹介（前書き）

この話を読む前に、一つ前の「人物紹介」天崎家の家族編」を読
んでおく事をお薦めします！

第五話 微毒な少女 家族紹介

今回は玲花視点のお話です。

「「ただいまあゝ」」

あたしとふうちゃんの声が重なる。

実はあたしは、この『天崎家』に居候している。

あたしの母親は、あたしが幼稚園に通っていた頃に病死し、父親も、あたしが中学校に入学するちょっと前に病死した。

あたしの父親と、ふうちゃんのお父さんである紘^{こう}さんは兄弟で、あたしの叔父にあたる紘さんが、両親を失ったあたしを引き取ったのだ。

「おじゃまします。」

昼休みに言っていた通り、ユメもしっかりついてきた。

由美さんとナツ姉に会ってみたい、って言ってたけど、きっとビックリするわね。

ユメも結構美人だけど、由美さんとナツ姉には敵わない。

ていうか、由美さんもナツ姉もレベルが高すぎる。

由美さんは、ハーフで、顔立ちも整っている。

さらに、すごく綺麗な長い金髪で、すれちがった男性みんなが振り向くくらい魅力的な人。

ナツ姉に至っては、ちょっと街を歩くだけでいろんな男に声をかけられる。

ナツ姉と一緒に買い物に行くと、言い寄る男共がウザくて、買い物が予定通りに進まない。

あたし達の通う学園の高等部でも、ナツ姉は未だに有名だ。

ふうちゃんが一気に有名になったのも大半はナツ姉の影響だと思う。今の三年の男子が、入学式の日

「天崎夏美の妹が入学した！しかも外部新入生の代表だし、ヤバいくらい可愛い！」

って騒いでるのを見たし。

三年になっても男子は男子だ、って思ったわ。

「冬花ちゃん、玲花ちゃん、おかえりなさい。

あら？おともだち？いらっしやい。ごゆっくりどうぞ。」

出迎えてくれたのは、由美さん。

ユメを見ると、やっぱり由美さんを見て呆然としている。

「…あ、は、初めまして。飯田夢菜と言います。よ、よろしくおねがいます。」

動揺しながら、なんかおかしい挨拶をしている。

「あら、ご丁寧に、ありがとうございます。私は天崎由美。冬花ちゃんの母です。」

由美さんも丁寧に返す。

「玄関で立ち話するのなんだし、客間にいこう。」

ふうちゃんの一言で、居間に移動する。

天崎家は、洋風の大きな家で、屋敷に近い雰囲気がある。

当然、ひとつひとつの部屋も広く、客間だけでも体育館の半分近くある。

そして、居候のあたしにも、まるで当然のように広い一人部屋が与えられている。

最初の頃は、かなり遠慮していたあたしも、今ではすっかり馴染んでしまっている。

話がそれってしまったけど、とにかく、天崎家は大きい。

客間に着くまで、ユメは落ち着きなくキョロキョロとあちこちに目を向けていた。

この調子だと、ユメが家に帰る頃には疲れきっているわね。確実に。

そんなこんなの間客間に着いた。

なぜか、客間だけは和室で、畳に座布団、といった感じだ。

廊下をはさんで隣が居間なので、微かな話声で、居間に誰がいるのかわかる。

今日は、紘さんとハル兄とアキラは、午前中のうちに一週間の出張から帰ってきて、午後は休みだから、少なくとも紘さんとアキラは家にいるはず。

ハル兄は結婚してからは、ここから歩いて約五分の所にある別宅に、奥さんと二人で暮らしている。

「…ほう、うちの…よりも…みたいだね。」

「……じゃねえ？……なんだし。」

案の定、居間からは、紘さんとアキラの話声が多少聞こえる。

…けど、廊下をはさんでいるからか、声を微かにしか拾えないため、内容はさっぱりわからない。

「はい。…でも、……ちょっと…」

女の人の声もする。

ん？この声は…清奈^{せいな}さん？

「清奈お姉ちゃんも来てるんだあ…私、清奈お姉ちゃんに挨拶してくる♪」ふうちゃんが嬉しそうに居間へ向かう。

清奈さんとハル兄は、中学生の頃から付き合っていたらしい。

その頃、ふうちゃんは幼稚園児だったから、ふうちゃんにとって、清奈さんは実姉同然なんだと思う。

まあ、会えるだけでこんなに喜ぶのは、ふうちゃんがシスコンだからなんだけどね。

「ほら、ユメ。あたし達も行くわよ。あっちの部屋にみんないるみたいだし、あなた、ここの家族に会いたがっていたじゃない。」

「…うえ？…あ、ええ。」

居間には、予想通り、紘さん、ハル兄、アキラ、清奈さんがいた。由美さんも、あたし達の分と思われるお茶をいれている。

「清奈お姉ちゃんっ、こんにちは。」

「清奈さん、お久しぶりです。」

ふうちゃんは、真っ先に清奈さんに挨拶した。
あたしも清奈さんに挨拶する。

「あ、お父さんとお兄ちゃん達、おかえりなさい。」
ふうちゃんの、取って付けたようなおかえりなさいに、出張帰りの男三人はがっくりする。

「オイオイ…今、俺達を忘れてただろ冬花…
しかも玲花に至ってはシカト…」

アキラの呟きで、おかえりなさいを言い忘れていた事を思い出した。

「紘さん、ハル兄、おかえりなさい。
あ、ついでにアキラ、おつかれさま。」

「…ハハ、ヒデエな、オイ。出張帰りの恋人に言う労いの言葉は『ついで』かよ。」

引き變った笑顔でアキラがそういう。

「当然。…ところで清奈さん、きょうはどうしたんです？
なにか大変なことでもあったんですか？」

「うーん…」

とりあえず、アキラはほつといて、清奈さんに聞いてみる。なんだか、言いづらい事のようにだ。
すると、由美さんが、お茶を持ってこつちに来た。

「私の出産予定日より清奈ちゃんの出産予定日のほうが早いのを
気にしてるみたいなの。」

私より先、って言っても、ほんの一週間くらいだし、あくまで予定
日なんだから、気にする事はないと思うんだけどね。」

成程…でも、確かに気にする程の事でもないと思う。

「そうですよ、清奈さん。」

いいじゃないですか。順番なんて。

それよりも産まれてくる子供との幸せな日々に想いを寄せた方がいい
ですよ。」

「うーん…そうなのかしら…？」

…やっぱり悩まさっちゃうのね…

ふと、ユメの事が気になって様子を見ると、ユメは紘さん達と自己紹介をしているようだった。
なんだ、ユメ、以外としつかりしてるじゃない。

そんなこんなしているうちに

「ただいまあ。あれ？みんな勢揃いして、どーしたの？
若干一名、知らない女の子もいるみたいけど。」

ああ、ナツ姉が帰ってきちゃった。

ってか、ホントに図ったかの様なタイミングで全員揃ったわね。

「あゝお姉ちゃんおかえりなさいゝ」

またもや、ふうちゃんが嬉しそうになる。

「ただいまあゝ冬花ちゃん。」

ナツ姉も嬉しそうにそう言いながら、ふうちゃんを抱きしめる。

こっちもシスコン…その上、ナツ姉は若干レズっ気アリ、だ。
ナツ姉…アナタ、恋人いるでしょう…婚約までしてる恋人が…

…このシスコン姉妹め。

でも、何時見ても絵になるわ。

この、美女姉と美少女妹の笑顔の抱擁シーンは。

ユメなんか、もうポーツ、としちゃってるし。

「…冬花ちゃん以外はお父さん似なんだね。」

「そっいえばそうね。」

確かに、この家で金髪をもっているのは由美さんとふうちゃんだけで、他のみんなはあたしも含め、黒か茶だ。

あら？そっいえば、あからさまに外国人の血が入っているとわかるのも、由美さんとふうちゃんだけね。
遺伝子の神秘？

* * * * *

あれからすぐに、ふうちゃんは部屋を片付けに行った。
十分きれいな部屋なんだけど、人を呼ぶなら片付けなきゃいけない場所があるらしい。

ユメは、全員と自己紹介をして、ナツ姉と軽いお喋りもしてた。

…ナツ姉、ユメの胸を見て口元緩めてた…

んで、ユメは今あたしと一緒に、客間でお茶を飲んでふうちゃんを待っている。

「…すごいね。ここの家族。」

ユメが、未だにぼんやりした様子でポツリと言う。

「この家族の中で過ごすと、自分の容姿に自信無くすわよ。
あたしだって自分の顔には自信あるけど、この家族の中だと一番地味なのよ。」

客観的に視ると。」

そう。あたしは、自分が美人だってことくらい気付いている。

『学年一のクール系美少女』と呼ばれていることだって知っている。

“学年”一のクール系美少女と、“学園”一の可愛い系美少女が、
いつも一緒にいるから、相乗効果で二人とも、注目度が異様に上がる。

それなのに、ふうちゃんは未だに自分が、超ハイレベルの美少女であることに気付いていない。

さっきも、帰り道で

「うちの学園、変わってるよね。

女の子は美人さん多いのに、

男の子は私に告白するような変わり者ばかりだし。」

何て言ってたし。

危うく突っ込むとこだったけど、勘違いを訂正したところで、信じようとはしないのは、昼休みの会話でも実証済みだ。

要するに、あたしは自覚してる分、多少なりともプライドがあるからヘコむけど、ふうちゃんは自覚してないで、自分は普通と決め込んでるから、そういう点ではあっけらかんとしている。

「本当に凄い家族だねえ……」

……ごもつともだわ。

そんなこんな話してたら、足音が聞こえてきた。
ふうちゃん、片付け終わったのかしら。

「あ、冬花ちゃんのお母さん。」

え？由美さん？

ユメの言う通り、由美さんが客間に来た。

「夢菜ちゃんに…ちょっとおねがいがあるの。」

真剣な表情で由美さんは言った。

由美さんがこの表情になるのは、大抵、家族がらみのことだ。

「あなたはきつと、何があってもずっと冬花ちゃんと一緒にいてくれると思うから、お願いしたいの…」

冬花ちゃんに、必要以上に男の子達を近づけないであげてほしいの。あの子、小さい頃から誘拐されたり、大怪我させられたりすることが多かったの。

その犯人がほとんど男性だったから、あの子、すごく男性を怖がるようになっちゃったの。

それにね、あの子、一度心臓の手術してるから、念のため、ってことで激しい運動とか、吃驚するようなことは控えなきゃだめなの。だから、不必要に男性を近づけないほうがいいと思って…」

ふうちゃんは今まで、いろんな犯罪の被害者になってきた。

ストーカー被害なら、この家の皆が少なくとも一度は被害をうけて

いる。

だけど、ふうちゃんは格が違う。

見た目の弱さ、可愛らしさのおかげで、危ないロリコン男などに狙われ易かった。

あたしが記憶してるだけでも、誘拐が五回・傷害が四回・ストーカー被害が三回と、異常な回数の被害に遭っていた。それらの内、二回の誘拐を除く全ての犯人が男だったせいで、家族、幼馴染み以外の全ての男性に対して、強い不信感と恐怖心を持つようになってしまった。

今では、用事がなければ、自分からそれらの男性には近寄ろうとは決してしなくなった。

用事があっても、必ず1m以上は離れてるけど。

「そうだったんですか…心臓のことは聞いていたんですけど…」

男子に告白されたあと、いつも青ざめた顔してたから、なんでかな？とは思ってたけど。そんな事情が…

わかりました。少し気を付けてみます。」

ユメは納得したらしい。

「よかった。ありがとうね。」

由美さんの顔は、安心した母親の顔になっていた。

あたしにとつても、よかった。

あたし一人だと、どうしても完全には男達を避けきれないのよ。

まあ、二人でも完全には無理だけど、かなりマシにはなるでしょう。

その後は、ふうちゃんが部屋を片付け終わったので、ふうちゃんの部屋へ行き、七時ごろまでテキストに遊んだりお喋りして過ごした。そのあと、晩御飯を食べて、ハル兄と清奈さんに送られてユメは帰っていった。

第六話 小さな少女 自己中男注意報？

「ふうちゃんは部活に入るの？」

突然、玲ちゃんに訊かれた。

ちなみに、夢ちゃんは陸上部に入りたいみたいで、部活見学に行っている。

「え？部活？えつと、料理部かな？」

運動系の部活はドクターストップがかつてるし。」

後半は思わず声が小さくなる。

私は、中学の頃は、バスケット部に所属していた。けど、二年生の秋頃、練習中に突然倒れた。

心臓が悪かったらしい。

手術をしなければ生きられないと言われたときは流石に、私の人生踏んだり蹴ったりだなあ、と思って絶望したけど、手術も成功して今では普通に生活出来るようになった。

ただ、今でも激しい運動は禁止だし、心臓に負担をかけないようにしなさい、とも言われている。

「料理部？あつたの？そんな部活。」

「えと、まだ同好会なの。ついこの前、二年生の先輩に、『一緒に料理部つくらない？』って声掛けられて。ゆつくりとケーキ作りたかったし、楽しそうな気がしたからOKしたの。」

私は、ケーキ作りと料理にだけは自信がある。

料理は、お料理教室の先生に

「すぐにでもお店に出せる味だわ！」

と、大絶賛されたこともある。ケーキ作りの方が得意だけどね。

料理部については、玲ちゃんも興味があるみたい。

「いいわね、それ。あたしも料理の腕研きたかったし。」

ふうちゃんに教われればきつとすぐに上達するでしょうし。

…よし、あたしも料理部に入るわ。」

「ホント！？わあっ♪一緒にがんばろうね！」

実を言うとしよつと心細かったんだよね。まだ、部員は私と先輩の二人だけだったし。

「ところでふうちゃん。ケーキ作るって言ってたけど、作った後はどうするの？」

まさか、皆に配る気？」

玲ちゃんは、お母さんのお店の事を心配してるんだろうなあ。お母さんのお店の一番人気メニューは私が作ったケーキらしいし。

「最初の何回かは、ね。

皆に食べてもらって、お店の味を知ってもらえばお店のお客さんも増えるでしょ？」

「成程、ちゃんと考えてるのね。」

「もちろん！私、これでもあのお店の看板娘なんだよ？…あんまりお客さんの前には出ないけどね。アルバイト扱いだから、お給料もちゃんともらってるし。」

「嘘っ！あれバイト扱いだったの！？」

すっごく驚いている玲ちゃん。

「うん。『看板娘お手製ケーキ』の売り上げの一部が私のお給料になるんだよ。

私、ちよつとは店内に顔を出したりはするけど、男性客の接客は無理だから。」

私が行く曜日は、火・木・土と、自分で決めてるけど、たまに他の日にも行くことがある。

それで気付いたんだけど、私が行く曜日は男性客が凄く多い。
店員の^{まへは}前波さん（24歳・独身[♀]）に訊いてみたら

「ああ、癒しを求めるおっさんが半分、ロリコンが半分ってところだな。」

と、結構辛辣なことを言っていた。

「でも、いいの？バイトあるのに部活なんかやってて。」

「心配無用だよ。元々、不定期のバイトだし。
ケーキを作って持っていけば、それで仕事になるもん。
材料費は自腹になっちゃうけどね。」

「その話、本当か？」

突然、後ろから男の人に声をかけられる。

私は、反射的に振り返って後退る。

「やあ、天崎さん達。」

後ろに立っていたのは、同じクラスの幸田成こうだせいいち一君だった。

「あら、盗み聞きだなんていい趣味してるじゃない。幸田君。」

玲ちゃんの態度は不機嫌丸出した。

…こういうときの玲ちゃんはいつても以上に言動に容赦がない。

「偶々、用事があつて同じ方向に向かつてただけだ。盗み聞きだなんて人聞きの悪い。」

幸田君がムツとした顔で言う。

「なら、そつちの“用事”優先させたら？
まあ、その“用事”っていうのがあたし達のストーカーだっていうなら話は別だけど。」

「なっ……！だ、誰がストーカーだ！」

「違う？あなたがあたし達を追い抜いていくように、ゆっくり歩いてただけどねえ。」

わざわざ歩調まで合わせて、ずいぶんと陰湿な“用事”なのねえ。」

「な……！」

「ちょ、ちよつと玲ちゃん、言いすぎじゃないかな……」
私の言葉に、玲ちゃんはちよつとだけこつちを向く。

「事実だもの。言いすぎってことはないわ。」

そして、また幸田君の方を向く。

「気付いてないとも思った？残念だけど、教室出てすぐに気付いてたわよ。
窓ガラスに写ってたし。」

玲ちゃん鋭いなあ。窓ガラスなんかで分かったんだ。

つて、え！？
教室出てすぐ！？

どうしよう、心臓の病氣のこと、あんまり知られたくないのに…

「大丈夫よ。あれはあたしにも辛うじてきこえた程度の声だったから。」

玲ちゃんは、私の不安を的確に読み取って、小声で励ましてくれた。

…ありがとう。玲ちゃん。

「さ、こんなのはほつといて、早く帰りましょう、ふうちゃん。
ユメも今日は遅くなるみたいだし。」

「う、うん。」

「お、おい！俺の質問に答えろよ！」
突然、幸田君が叫んだ。

「何の事だか知らないけれど、こっちはこれ以上あんたに構ってる暇はないの。
ふうちゃんをお店に送ったら、あたしはデートなんだから。」

あ、玲ちゃん、今日デートだったんだ。
そういえば今日、秋良お兄ちゃん早く帰ってくるって言ってたっけ。

「お前の都合なんか知るか！
俺は天崎さんがあのケーキ屋の看板娘だっていうのが本当か？って訊いてんだよ！」

「…自分勝手な上に馬鹿なのね、あんた。
ふうちゃんが、にこやかに会話しながらあたしに嘘を吐くとも思
ってるの？」

場の空気が険悪になる。

…何か嫌な予感がしてきた。

「れ、玲ちゃん、デートあるんでしょ？こんなところでケンカなんか
しないで、早く帰ろう？
じゃあね、幸田く——」

「待てよ！」

——腕、掴まれた？

途端に、背筋が凍る。
振り解こうとしても、かなり強い力で掴まれているのか、びくとも
しない。

——嫌だ、イヤだ。いやだ！

「やめてえっ！手、離してえ！」

「離したら逃げるだろ！？」

俺の話訊いてくれるまでまで離さねえぞ！」

「やだ！やだやだやだはなしてえ！！！」

——嫌だ、いやだ！怖い、こわい……

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

気が付いたら、私は、お母さんのお店の店員用の休憩室のベッドに横になっていた。

隣のベッドには、勇君が座っていた。

「あれ？勇君？どうして？私、確か玲ちゃんと…」

「気が付いたか？」

… おおよその事情は玲花から聞いた。

お前、『思慮の浅い馬鹿男』とやらの腕を掴まれて錯乱したんだ。

… やっぱり、まだ、治らないんだな。」

勇君に言われて、私は、そのときのことを思い出した。

私は、ベッドから起き上がって勇君の隣に腰掛ける。

——彼女さん。今日だけは、勇君の隣に居させてください。

「…一度だけ診てもらった精神科の先生が言ってたんだけど、私の中で『異性』と『他人』の認識がかぶったらアウト、なんだって。心の傷も深いようだから、簡単に治るようなものじゃないって。」

私自身は、治らなくてもいい、って思ってる。

下手に男の人に関わって、これ以上嫌な思いしたくないから。」

話の途中から、勇君が私の頭を、優しく撫でてくれていた。私はすっかり安心して、思いを口にしていた。

その後も、勇君は隣にいて、私の頭を撫で続けてくれた。

勇君と一緒にいた時間は、暖かくて、優しい時間だった。私の心の中にも、暖かい気持ち広がっていった。

第七話 小さな少女 辛い日々と楽しい(?) 部活

私が錯乱した次の日、幸田君は私に謝りにきた。
そして、

「中学の時から、看板娘をしていた君が気になってたんだ。好きだ。
付き合ってくれ！」

告白してきた。

「……ごめんなさい。好きな人がいるんです。だから付き合えません。
」

私は、そう断って立ち去った。

「…好きな人お？…そんなの知るかよ…諦めねえぞ…絶対に……」

そんな不穏な言葉が、聞こえた気がした。

* * * * *

幸田君に告白されて三週間が経った。

あの日から、幸田君は毎日、やたらと私に近づいてきて、最後に告白していく。

何度目か彼の告白を聞いたときに思ったけど、彼はきっと私の事を好き、というわけじゃない。

何て言うか、気難しいペットを手なづけようとする感じ、というのが一番近いと思う。

しかも、異常な程執念深くて、かなり頻繁に私の近くに現れる。授業中でさえ、睨まれている様な、嫌な視線を感じる。

今ではもう、本当にストーカーのようになってしまっていた。

…正直、すごく怖い。

学校で、一人になれない。

* * * * *

放課後の調理室。

部活の時間は、今、学校で安心していられる数少ない時間。

「あら、冬花ちゃん。今日はケーキじゃないのね。」

声をかけてきたのは、私を料理同好会に誘ってくれた、部長の河野

ゆりか
由梨香先輩。

去年までは学園一の可愛い系美少女だったらしい先輩。

（玲ちゃん曰く、今年の学園一の可愛い系美少女は私らしい。きっと、いつもの冗談だと思うけど。）

「はい。今日はチョコクッキーです。」

この前の日曜日に、家で一度作ったんですけど、改良の余地がありそうだったんで、今、チョコクッキー・改を作ってるんです。」

「チョコクッキー・改…」

微妙な名前…と呟く由梨香先輩。

確かに、捻りもなにもない名前だとは、私自身も思ってます…。

「やつほう ♪ みんな来てるわねえ ♪」

「あつ、瑞穂先輩。先輩も後でチョコクッキー食べてみて下さいね。」

「OKよ ♪ 冬花ちゃんの作るものはすごく美味しいものねえ ♪ 楽しみだわ ♪」

陽気に入って来たのは三年生の相模 さがみ 瑞穂先輩 みずほ。
勇君の元彼女さん。

結局、勇君は瑞穂先輩と別れたらしい。
しかも、私のお説教のすぐ後に。

部員の初顔合わせの日に、瑞穂先輩を見て
「勇君の彼女さん!？」
と驚いた私に

「元よ、元 ♪ 今はただの友達よ ♪」
と言って、後で事の転末を詳しく説明してくれた。

ちなみに、瑞穂先輩は料理が苦手らしい。

活動初日には、調理室の赤いフライパンを黒く生まれ変わらせたし、二日目は、鍋が燃え盛っていた。

今までの七回の活動の中で、一回も成功していない。

それにしても、どうやったら赤いフライパンの外側を一発で真っ黒に出来るんだろう。内側なら兎も角…。

「さて、あたしは今日は初日と四日目に失敗したコロッケにリベンジしようかな?」

…コロッケ!?

「ええっ！？コロッケ作ろうとしてたんですか！？
初日はべっこう飴じゃなかったんですか！？
砂糖水入れてたじゃないですか！」

「あら、入れないの？」

「普通は入れません！」

由梨香先輩はコロッケと聞いた辺りから呆然としている。

さつきから一言も喋ってないけど、玲ちゃんもいる。

玲ちゃんのいる方をみると、玲ちゃんはちょうどコロッケをフライ
パンに入れたところ…

…って

「玲ちゃん！？さつき、ドーナツ作るって言ってなかった！？
なんでコロッケになってるの！？」

「急にジャガイモのコロッケが食べたくなった、なんてふざけたメルをアキラがよこしてきたのよ。」

「あ、そうだったの。……って、秋良お兄ちゃんが！？揚げ物あまり食べないのに！？」

「知ってるわ。だから作ってあげたのよ。長芋で。」

「長芋！？」

「…フフフ、アキラめ…あたしをおちよくってくれちゃって…冗談で済むわけがないってわかってるのかしら…？」

最近、学校に来るのが怖いけど…
でも、この時間は…
心から安らげるこの時間は大好きです。

オマケ

キャラ視点なし

「なあ、玲花…。」

「あら、なにかしら？アキラ。」

「本当に、作っちゃったのか？コロッケ…（冗談だったのに…。）」

「フフフ…当たり前じゃない（ハハハ）。しっかりと作ったわよ？
長芋のコロッケ。」

「はあ！？な、長芋！？」

「ええ。……残さず食べなさいよ？（ハハハ#）」

「うつ…わ、わかったよ…（なんで…なんであんなメール送ったんだよ今朝の俺はあー！！！！）」

本日の発見一つ目…長芋コロッケはなんともいえない微妙な味。

二つ目…玲花を相手に微妙な冗談は言うべきではない。

第七話 小さな少女 辛い日々と楽しい(?) 部活(後書き)

ちよつとギャグを入れたのは間違いだっ
たかも…。

第八話 小さな少女 体調不良で保健室へ（前書き）

連載し始めた時点で十話まで用意してあったのに現在はまだ十二話執筆中…。

す、進まねえです、隊長…！

第八話 小さな少女 体調不良で保健室へ

さらにあれから一週間。

五月の下旬、一学期球技大会が近付いてきた頃。

私は毎日のように身の危険を感じていた。

私に近寄る幸田君の目からは、もうすでに、憎悪のような感情を読み取れるようになっていた。

私はもう、玲ちゃんや夢ちゃんがいても、人の少ないところには行けなくなっていた。

* * * * *

今日の二限目は体育で、いまは移動中。

私は体育には参加できないけど、何度かは見学してないと、出席日数が足りなくなって、単位の関係上まずいことになる。

男子と女子は当然、別々で、今日は男子がグラウンド、女子が体育館。

だから、今は体育館に向かっている。

体育館は別棟にあり、校舎とは繋がってないため、一度、グラウンド前を通って行かなければならない。

正直、今は幸田君を視界に入れたくないし、幸田君の視界に入りたくも無い。

「ちょっと冬花ちゃん、すごく顔色悪いよ。大丈夫？

保健室行かなくていいの？」

「間違いなくあの自己中馬鹿男のせいね。

…でも、保健室は駄目ね。あたし達は追い返されちゃうわ。馬鹿男に気付かれないとも限らないし。」

夢ちゃんと玲ちゃんが心配してくれる。

「…うん。すごく申し訳ないんだけど、出来るだけ一人にしないで…一人になるのはすごく怖いの。」

何でもいつもこんなことになるのかな？
私が…、私が悪いのかな…？

「何か深刻そうだね。どうしたのか教えてくれない？」

「！！」

この声は…

「やあ、久しぶり。」 「よう！」

顔を上げて、正面を見ると、そこには、一学年上の幼馴染みの、白波翔太ちゃんと黒瀬硬介くんがいた。

「久しぶり。翔君、硬君。前の時間、体育だったの？」

「そうだよ。…って、冬花、顔色悪いね。本当に何があったの？」

「それについてはあたしが話すわ。」

玲ちゃんが二人に事情を説明してくれる。

ふと、夢ちゃんの方を見ると、何か訊きたそうな目でこっちを見てる。

「どうしたの？夢ちゃん。」

「え？あ、うん、と。」

冬花ちゃん達、こーすけ兄と知り合いだったの？」

「硬君？うん。みんな幼馴染だよ。夢ちゃんは？」

「え？そうだったの？実は私達、再従^{はとこ}兄妹なのよ。血縁はかなり薄いけど、親戚よ。」

「え？そうだったの？

…人って、意外なトコで繋がってるんだね。」

「そうねえ。」

* * * * *

「成程な。しつこくて鬱陶しい男だ。

…ところで、ずっと気になってたんだが、なんで夢菜がいるんだ？」

「「友達だもの。」」

三人とも揃った。

「…そか、野墓なこと訊いたな。すまん。」

「まあ、それよりも、僕は冬花を保健室に連れていくべきだと思うな。

この状態じゃあ長くはもたないよ。」

「それはそうなんだけど、でも…」

渋ったように、玲ちゃんが言う。

「ねえ硬介。」

「ん？何だ翔太。何か名案か？」

その硬君の問いに、翔君は微笑んで答える。

「僕は体育が終わって体調が悪くなったんだ。冬花と一緒に暫く保健室で休んでるよ。」

笑顔で言う翔君。

「…成程な。わかった。
次の教師には俺が伝えとく。」

「だ、駄目だよ！翔君、授業についていけなくなったら…」

「僕の体調が悪いのは僕の所為だからね。冬花は気にしないでいいんだよ。」

それに冬花。君は外敵になり得るものが多いんだから、頼れる人達にはおもしろいきり甘えなさい。

それは迷惑にはならないものだから。」

翔君の優しい言葉に、思わず涙が出てくる。

「…いい、の？」

本当、に？…迷惑に…ならないの？」

「うん。いいんだよ。頼られるのって、嬉しいものだから。それに、冬花は僕たちにとって家族みたいなものだからね。」

「…ふえっ…ううっ…ありがとう。翔君、皆…ううっ…」

本当に皆、すごく優しい。

泣いている私の頭を、翔君は優しく撫でてくれる。

「勇希兄さんみたいに、冬花の落ち着くリズムを知っている訳じゃないからうまくは慰められないけど…
でも、少しはマシにならないかな？」

確かに、勇君のリズムとは違うけど、私の心は、十分に落ち着いた。

「ううん。…グスッ…十分だよ。ありがとう。」

泣きながらだけど、ここ最近、どうしてもだせなかった、“心からの笑み”を出せた気がした。

「さあ、保健室に行こう。」

玲花、冬花のことは先生にちゃんと伝えておいてね。」

「わかってるわよ。」

そして、私は、翔君に付き添われて、保健室へ向かった。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

保健室にはいると、そこには美人な校医の先生がいた。

…本当に美人さん多いなあ。この学園…。

「失礼します。」

「お、おじゃまします。」

私は、ここの保健室のお世話になるのは初めてなので、ちょっと緊張していた。

「いらつしゃい。」

あら、白波君じゃない。珍しいわね。サボリ？」

「今日は付き添いですよ。」

ちよっとこの子を休ませてあげて下さい。僕も暫くはついていていいです。」

そう言って、二人は私の方を向いた。

「あら、可愛い子ね。ここに来るのは初めてでしょう？
私は校医の河野麻梨香よ。」

ここ、一応利用記録つてものを付けてるのよ。
だから、あなたの学年、組、名前を教えてね。」

「は、はい。えと、一年A組の天崎冬花です。」

「ふうん…。あなたがあの…。」

河野先生は、すらすらと、用紙に私の学年、クラス、名前を記入していく。

あれ？そついえば河野って…。

「あの、河野先生。先生って、二年の由梨香先輩のお姉さんですよね？」

「あら、早速ばれちゃったわね。
まあ、名前が似てるものね。」

「はい。でも、顔とか雰囲気もかなり似てますよ？」

「そつ？そつ言われたのは初めてね。」

そう言って、河野先生はにっこりと微笑んだ。

「あれ？冬花、ユリちゃんのこと知ってたんだ。」

翔君が私に尋ねてきた。

「うん。部活の先輩。」

そういう翔君だって、『ユリちゃん』だなんて。

…まさか、恋人？」

「中学校からずっと同じクラスなんだ。友達だけど、恋人ではないよ。」

「そうだったんだ。」

「お話が終わったなら、今の体調を教えてね。」

「あ、はい。えっと、腹痛に眩暈、頭痛、吐き気……。」「

「ああ、ストップ。もう良いわ…。
きつと、寝不足とストレスが原因ね。
目の下に隈ができてるし、顔色もかなり悪いし。
よくそんなになるまで我慢出来たわね。暫くおとなしく寝ていなさい。」

やっぱり私、ストレス溜ってたんだ。
そういえば最近、眠れても夢見が悪かったし。

「はい…。ありがとうございます。」

そして、私は奥のベッドを借りて、ゆっくりと眠りに就いた。

第九話 女性な少年 しょーもない理由（前書き）

今回は、冬花に対して好意を持った、と自覚したはずの勇希が、一向に行動を起こさないその理由です。

まあ、タイトルどおり、しょーもない理由ですけどね。

第九話 女性な少年 しょーもない理由

昼休み。

俺は今、屋上にいる。

うちの学園の高等部は、屋上の生徒の出入りに関して、黙認している。

いつもは、サボりの生徒やカップルがいるが、今日は一人もいない。

俺が今、ここにいるのは、硬介に呼び出されたから。

「よう。勇兄。」

話かけてきたのは、がっしりとした、見た目筋肉質の男。

こいつが硬介。俺の一個下なのに、俺より身長が高く、顔立ちも男らしく整っていて、声も低めで、ガタイもいい。

対する俺は、細身で女顔。声も高め。のど仏もほとんど目立たず、外見では、胸が無いことと、服装でしか男であることを証明できない。（それでさえも、男装と思われる可能性が高い。）

正直、硬介と面と向かっているだけで、外見に対するコンプレックスが刺激される。

けど、んなことは顔にはださない。

「おう、硬介。なんだ？話つてのは。」

ろくな事じゃない気がするけどな。

「んじゃ、率直に訊こう。」

勇兄さあ

冬花のこと、どう思ってる？」

「は？どつって…？」

「冬花を異性として意識したことがあるか？って意味だよ。」

……は！！？

「…な、な？な！！？突然何を…！」

「ほう、その反応を見る限り、あるんだな。
ま、そうだよな。冬花、超・高レベルの美少女だし？」

そう言われて頭に浮かんだのは、身長差のおかげで、いつも上目使いに俺を見上げる冬花の顔。それも、顔が赤くなっていることが多い。

——たしかにあの上目使いは可愛いな。
あ、そう言えば、寝顔も可愛かったなあ。

「ほうほう、それで？」

「うわあっ!？」

「ハハハ、勇兄。声にでてたぜ。」

…マジか………すげえ恥ずかしいなオイ…。

「でもまあ、良かったじゃん勇兄。冬花の恐怖症のおかげでライブ0だぜ？」

「う…だ、だけど、ちょっと気後れしちまうんだよ。」

「なんでだよ。レズカップルって言われるのが嫌なのか？」

…オイ、コラ。

「いや、そうじゃねえよ。…てか、人が気にしてることを遠まわしに…。」

…って、俺が言いたいのはそういうことじゃなくて、アイツの顔が美月に似すぎてて、いけないこと考えてる気になっちまうんだよ！」

美月っていうのは、俺の妹。冬花の一個下。

赤の他人だというのに、顔だけ見れば、一卵性双生児のように瓜二つだ。

身長は美月の方が上で、髪の毛の長さは冬花の方が長かったりと、顔以外は結構違いがあるが、如何せん顔がソックリ過ぎる。

そのせいか、冬花に対してそういう気持ちを持つことに、危険を感じる。

まあ、あれだ。近親ほにやらら、とか何とか言う言葉が頭に浮かんで来るんだよな。

で、俺の返答を聞いた硬介は、理解できない、といった表情をしている。

「は？意味わかんねえよ。

冬花は冬花、美月ちゃんも美月ちゃん、だろ？

似てるだけで、冬花は勇兄の妹じゃ無いんだし。

似てるから、なんて気にしてたって意味無いだろ。」

「！」

…そっか。そんな当たり前のことを、俺はわからなくなってたのか。

「…そう言われてみりゃ、そうだよな。気にしてたってしかたがないよな。

はは、馬鹿みたいだな。俺は。」

「それが解つたならはやく告白して冬花の彼氏になった方がいいぞ。さつき、冬花達に会ったけど、最近、厄介な自己中男がいるらしくて、冬花、今にも倒れそうだったぞ。」

「は！？大丈夫なのか！？冬花は！」

まさか、玲花がこの前言っていた『思慮の浅い馬鹿男』か！？

「いや、ヤバそうだったから、翔太が保健室に連れてったぞ。
…余程酷いやツなんだろうな。その幸田って男は。」

……はあ！？幸田だと！？

「硬介！その幸田って、ひょっとして幸田成一って名前だって言うてなかったか！？」

「あ、ああ。そんな名前だったぜ？」

「ヤバイぞ！幸田成一は……」

その時、ガン！という鈍い音と共に屋上の扉が開き、長い金髪の女子生徒が一人、ヨロヨロと屋上に出てきた。

噂をすれば影。

その女子生徒は、冬花だった。

第九話 女性な少年 しょーもない理由（後書き）

さて、冬花はいつたいたんでしょうね…。
それはまた来週に。

第十話 小さな少女 自己中男大暴走（前書き）

危険な描写あり！
ご注意ください！

第十話 小さな少女 自己中男大暴走

今回、流血表現や暴力シーン、微グロテスクな描写が少なからず入ります。

十分に御注意ください。

保健室を出た辺りから、嫌な予感はしてた。

そして、私の、こういう時の嫌な予感は大体あたる。

教室近くまで翔君に送ってもらって、教室に入った。

「やっとお帰りか。ふん、先輩と保健室で何をやってたんだ？」

自分の席に戻ろうとしたら、幸田君がものすごく怖い顔でこっちに
来た。

…見られてた？
グラウンドの前を通ったから？

最悪だ…

せっかく気持ちが悪く落ちてきたところだったのに、一気にどん底
まで叩きおとされた気分になった。

しかも、玲ちゃんも夢ちゃんもいないから、結構まずいかもしれな
い。
周りの皆は見てみぬふりだし。

「…幸田君には関係ないじゃない。お願いだから、もう私に構わないで。」

怖いけど、強がって言うてみる。

「構うな、だと？ふざけるな。俺の『モノ』の分際で、この俺の告白を断り続けて、その上、あの先輩といい雰囲気…お前、ホントに何様のつもりだ？」

え…？

「…何…言ってるの？」

…何で…私のことを、あなたの『モノ』だなんて言うの！？

どうかしてるよ！幸田君！」

「……んだと？」

幸田君の目が、危ない光をともしだした。

片手で、胸倉を掴まれる。

——嫌！怖い！

「な！？馬鹿男！あんた何やってるの！
ふうちゃんを離しなさい！！！」

玲ちゃんが来てくれた。後ろには夢ちゃんもいる。

助かった、と思った。

その時は。

玲ちゃんが近付いてくる。

「ふうちゃんを離しなさいって、言ってるでしょ……!」

「うるせえ!! 邪魔すんじゃない!!」

幸田君は、私を掴んでないほうの腕で、玲ちゃんをおもいつきり振り払った。

「…っ!?!」

振り払われた勢いで、玲ちゃんは、いくつかの机と椅子にぶつかって、最後に教卓の角に頭を打っていた。

「玲花ちゃん!!」

夢ちゃんが、倒れている玲ちゃんに駆け寄る。

玲ちゃんの頭からは、血が出ていた。

そして、それを見た夢ちゃんはオロオロしてしまっている。

それでも周りの皆は、ざわめいているだけ。

幸田君に脅えているのか、近付こうとしない。

「酷い…！どうして…！」

「黙れよ。」

私の胸倉を掴んだまま、持ち上げた。

確かに私は身長低めだし、細身な方だけど、それにしたって30kg近くはある。

その私を片手で持ち上げてるんだから、相当腕力があるんだと思う。

——く、苦しい…

怖さと苦しさでろくな抵抗も出来ず、じたばたするしかできない。

「『モノ』が『所有者』に逆らうな！」

お前は黙って俺の言うことを聞いてりゃいいんだよ！」

幸田君の顔が近付いてくる。

——嫌！いやだ！近づかないで！！

そう思った瞬間、体が反射的に動いた。

「いやああっ！！」

気が付くと、幸田君の頬を平手打ちしていた。

幸田君は、一瞬、驚いた顔をしていたけど、次の瞬間には殺気立った表情をしていた。

「…ッのヤロー…！」

幸田君は私を持ち上げたまま、体を反転させ、勢いをつけて私を後ろの壁に叩きつけた。

背中に衝撃をうけ、左の方からバリン、という音が聞こえた。

そして、ブツブツと、刃物で肉を刺して切るような音。

「かはっ…！っ…！」

肺に残った空気が押し出され、衝撃の所為で、吸いなおすことが出来ない。

周りから悲鳴が上がり、何人かが教室をとびだして行った。

幸田君が、一度手を離し、今度は両手で私の首に手を掛けた。
そして、思いつきり絞められる。

「あっ…！が…あ…！！」

——くっ、くるし、い… たっ、たすけ、て…

——どすっ。

突然、首から手が離れた。

私は壁をずり落ちて、咳き込みながら荒い呼吸で床に座り込んだけど、逃げなきゃ、という意志が強く、すぐに立ち上がって教室から走り去った。

あとから聞いた話だと、幸田君の手が離れたのは、ショックから立ち直った夢ちゃんが、隙を突いて幸田君の『急所』を、全力で蹴り飛ばしたから、だったみたい。（「どすっ」という音は、その音だ

っ
たらしい。
）

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

気が付くと、私は、屋上の扉を開けていた。

「あれ？冬花？」

と、硬君の声。

屋上には硬君と勇君がいた。

「なっ！？どうしたんだ冬花！！その腕！」

勇君の慌てた声。

そこではじめて、私は自分の左腕の異変に気付いた。

無数に刺さったガラス片。

裂けた上に血に塗れて黒っぽくなった、元々は青に近い色だった制服の左袖。

ぽたぽたと、流れ落ち続ける血。

「痛い……」

ツキツキと痛む程度だったけど、見た感じがかなり痛々しかった。

「大丈夫か！？って、絶対に大丈夫じゃないよな！」

勇君と硬君が慌てて駆け寄ってきた。

「勇兄！何か刺さってるみたいだ！」

「…ガラスか！？まだかなり刺さってるな。このまま保健室に……」

腕の、傷のない部分を掴んで、軽く持ち上げ、傷口を見て勇君がいう。

感覚は、少ししか感じられなかったけど、幸田君に触られた時のように、嫌悪感、恐怖感を感じなかった。

感じたのは、安心感と優しい温もり――

「うつ…うわあああーん!!」

その瞬間、私の中で、ぎりぎりまで張っていた糸が切れた。
左腕は血まみれだったし、うまく動かせなかったから、私は、右腕と体で勇君にしがみついて泣いていた。

「!……相当酷い目に遭ったんだな。

…本当は、このままそつとしいてやりたいんだけど、それどころじゃないな、これは。

急いで保健室に行こう!」

そう言って勇君は、自分のネクタイで私の腕を、肩の辺りできつく縛った。

「さあ、早く保健室に!」

私は、勇君に抱えられて保健室に向かった。

* * * * *

保健室に向かう途中、私を探していた夢ちゃんと合流したし、保健室に着くと、中には玲ちゃんがいた。

二人とも、大丈夫？って訊いてきたけど、実は、さっきから眩暈と吐気がする。

それに、今更ながら、腕に激痛が走っていた。

河野先生は、私の怪我を見てすぐに救急車を呼んだ。

「かなり深くまで切ってるわね。神経切ってるかも。出血も多いみたいだし。」

腕、痛いかもしれないけど、少しでも動かせる？」

「はい…ホントに少しだけなら、なんとか…」

「少しだけ…ね。」

神経傷つけてなきゃいいんだけど…

…もう少しで救急車が来ると思うわ。

私が付き添うけれど…

…玲花ちゃん。あなたも来なさい。

頭打ったんでしょ？用心に越したことはないわ。」

「はい…わかりました。」

その後の病院での診察結果は、玲ちゃんは軽い打撲で全治二週間。

私は先生の危惧した通り、腕の神経を深く傷付けていたし、更に悪いことに腱も切っていた。

壁に叩きつけられた背中も、青痣になるほど強く叩きつけられたらしい。

腕は、すぐに手術ということになったけど、それでも、完治まではかなり時間がかかるらしい。

当分の間、左腕が使えないため、料理はほぼ出来ない。

当然、バイトも部活も出られない。

私は、勇君が病室に来て慰めてくれるまで、ずっと泣き続けていた。

第十話 小さな少女 自己中男大暴走（後書き）

うーん…。134cmで30kg近く、というのは重いか、軽いか、書いてて自分でもわからなくなりました。どうしよう。細身という設定なのに重かったら…。

ちなみにあの後、妄想男こと幸田は、騒ぎを聞いた数人の教師たちが駆けつけるまで、床の上を転がり続けていましたとき。ガラスが散ってるのにねえ…。

しょうがないといえ、しょうがないんですけどねえ…。

第十一話 小さな少女 嫌な『予感』

本来は、一ヶ月以上入院しなきゃいけないところを一週間で退院し、以後約半年の通院、ということになった。

腕の怪我だから移動には支障をきたさないし、何よりも、私が学生だから、という理由での配慮だった。

この前の出来事は、傷害事件扱いになった。

私が訴えることをしなかったから、刑事罰はないけど、学園側から、幸田君は一ヶ月の停学と、クラス変更、部活（幸田君はサッカー部だった。）の退部という処分が下されていた。

病院を退院して、私は一週間振りに登校した。

クラスの皆は、私達に対して、腫れ物に触るかのような扱いだった。あの後、入院の必要もなく、普通に登校していた玲ちゃん曰く、あの時、誰一人として助けに入らなかったことに罪悪感を持っているみたい、らしい。

私としては、過ぎたことをいつまでも根に持つつもりもないし、私の微妙な不幸は、今に始まったことじゃないから、あまり気にしないで欲しいと思っている。

それに、幸田君以外の誰かを憎もうだなんて思わない。

ただ、どうしても幸田君だけは憎く思ってしまうし、それ以上に、すごく怖い。

* * * * *

うちの学園は、幼等部から大学までの一貫校で、お金持ちの子息・息女が多く集まるお金持ち学園だ。

私や玲ちゃん、夢ちゃん、硬君、翔君は皆、高等部からの外部受験組で、内部組の事情を知っているのは幼等部から通っている勇君だけ。

幸田君も内部組だったらしく、勇君の話では、幸田君は、中等部の頃から、不良生徒として有名だったらしい。

女子に怪我をさせたのも、今回が初めてではないらしい。

私は今、左腕を吊っている状態。ギプスで固定もしていて、（捻挫用の着け外し可能のやつなんだけど。）痛み止めも常備だ。

神経を傷付けた上、腱まで切ってしまったため、ほとんど左腕は動かせない。

明日の球技大会は、私も玲ちゃんも出られなくなった。（私はどっちにしろ、運動系のイベントは出られないけど。）

「球技大会のことすっかり忘れてたわ。ユメ、頑張りなさいよ。」

「玲花ちゃん、ひょっとして、出たくなかったの？球技大会。」

「当たり前じゃない。あたしはスポーツは苦手なのよ。」

「そうだったの？」

「そうよ。」

玲ちゃん、かなりスポーツ嫌いだもんねえ…

中学校のときも、球技大会の日だけは、ズル休みしてたし。

「今年は堂々とサボれるわ。」

馬鹿男のせいだったのがムカツクけど。」

わ、玲ちゃん、怖い顔してる。

「まあ、兎に角、ふうちゃんと二人で応援してるから、頑張んなさいよ、ユメ。」

「…うん、まあ頑張るよ。」

それよりも、冬花ちゃんと玲花ちゃんこそ、頑張ってたね。っていうか、気を付けてね。

ずっと参加しないで待機してるから、二人を狙ってる男の子達に気を付けなきゃ。

未だに沢山いるみたいだし。」

…まだいるの？

「はあ、…つとにウザイったらないわ…
そもそも、あたしがフリーだっていうデマはどこからでたのよ。あたしは彼氏持ちだったの。」

うーん、噂って凄いなあ…。

間違っても凄い速さで広まるし。

* * * * *

球技大会当日、私は、朝から、嫌な予感がしていたので、常に玲ちやんと一緒に行動していた。

午前中は体育館へ、クラスの応援に出かけていた。

そして昼前頃、呼び出しの放送が鳴った。

《一年A組、天崎冬花さん、落とし物が届いています。生徒会室までお越しください。

一年A組、天崎玲花さん、沢村先生が呼びびですので、至急、職員室までお越しください。

繰り返します——》

…落とし物？

「同時に呼び出し？珍しい、ってか、妙ね。」

「うーん…私も変だと思うんだけど、行かなきゃそれはそれでまずいと思う。」

「気を付けてね。あたしは職員室だから変なことにはならないと思うから。」

「うん。わかった。」

* * * * *

生徒会室前に来た。

右手で扉をノックする。

「一年A組、天崎冬花です。入ってもよろしいでしょうか。」

「はい。どうぞ。」

生徒会室の中は、紙束やゴミなどでゴチャゴチャしていた。

出迎えてくれたのは、身長が、2メートル近くはありそうな背の高い男の人だった。

どこにでもいるような真面目そうな顔だけど、その目からは、なにか企んでいるような感情がうかがえる。

それを見た瞬間から、頭の中で警報が鳴り響いていた。

「まず、初めまして、かな？僕は生徒会長の赤黄^{あかぎ} 青治^{せいじ}。」

会長は、信号機みたいな名前だった。

「はあ、わざわざどうも。」

ついでに、入学式のマイクスタンドのことを思い出した。

——ああ、この人が…

「左腕の件は聞いたよ。災難だったね。」

なんでわざわざ思い出したくないことを思い出させるんだろう。
それも、嫌な感じに微笑みながら。

段々、嫌な予感が確信に変わってきた。

「…あの、…それで、落とし物、というのはいったい…」

「ん？ああ、あれね。

実は、副会長が預かってたんだけど…。

副会長、準備があつて体育館裏まで行っちゃったんだよね。
一緒に体育館裏まで取りに行こう？」

…え？

届いています、ってさっき放送で言ってたじゃない…。

呼び出したなら普通、そこに置いておくよね？

しかも一緒に取りに行こうって…

嫌な予感が完全に確信に変わった。

よくよく考えてみたら、左腕が使えないから、私はあまり物を持ち歩けない。

さらに、今日は球技大会なのでほぼ手ぶらだったから、落とす物なんてない。

「さ、行こう？」

きっと、ここで拒否してもうまく言いくるめられて、状況は好転しない。

むしろ、悪化する危険性だつてある。

私は、会長に先導されながらも、右手だけでこつそりと、会長に気付かれないように、玲ちゃんに助けてメールを送っていた。

* * * * *

ここからは玲花視点になります。

職員室に行ったものの、沢村先生はいなかった。

——やっぱり、はめられたわ…。

冗談じゃない。そう思いつつ、生徒会室へ、ふうちゃんを助けに行こうとして職員室を出たところに

「あれ、玲花？なにしてんだ？冬花はどうした？」

ばったり出会でくわしたのは勇希だった。

「さっきの放送聞いてなかったの？」

誰の仕業だか知らないけど、別々の所に呼び出されて引き離されたのよ。

狙いはふうちゃんでしょうね。」

「…ん？さっきの放送？

中身までは聞いてなかったけど、そういえばあの声は……赤黄のヤローか！？」

チツ！マズイな…。」

勇希が少し焦りを含んだ声で言う。

「赤黄って…、たしか生徒会長？

勇希、あんた面識あるの？」

「中等部の二年の時からずっと同じクラスだ。

ヤツも中等部の頃は幸田と同じく不良だったんだ。

備品は平気でぶっ壊すし、乱闘騒ぎは日常茶飯事だし、時には通り魔事件の容疑者に名前が上がっていた様なヤツなんだ。

今は生徒会長という皮を被ってるが、絶対に中身は変わってない！自分さえ良ければ周りなんてどうだっていいってヤツだ。」

「ちよっ…！！ふうちゃんやバイんじゃ…。」

《ヴヴヴ。ヴヴヴ…》

あたしのケータイのバイブが鳴った。

「メールだわ。」

…！ふうちゃんからよ！」

「なんて書いてある！？」

〇〇〇

From ふうちゃん
Sub たすけて

いま、あかぎというせいとかいちょうに、たいいくかんつらにつれていかれています。
なにかたくらんでいるかんじのひとで、こわいです。

〇〇〇

急ぎ気味なのか、変換されていなかったけど、ヤバそうな感じだった。

「大ピンチじゃない！早く行くわよ！」

「わかってる！！」

…クソッ！赤黄のヤツ…冬花を傷付けたら許さねえぞ…！」

ん？今の勇希の眩き……

いつもと感じが違うような…？

なんか心境の変化でもあったのかしら？

…これは、もしかしたらもしかするかもしれないわね。

ふうちゃん！状況が好転するかもしれないだから、こんなことに負けちゃダメよ！

「行くぞ！玲花！」

「わかってるわよ！」

第十一話 小さな少女 嫌な『予感』（後書き）

ああ…、ストックが減ってきた。

そろそろ更新が停滞してしまうかも…。

第十二話 小さな少女 牙を剥く信号機

今回は流血表現があります。十分にお気をつけください。

体育館裏に着いた。

やっぱり、周りには誰もいない。
ここに来るまでも、あまり人とすれ違わなかった。

「ふう、さてと。」

会長が、こっちを向いた。

「ここなら、誰にも邪魔されないね。」

実は、落し物っていうのは嘘で、天崎さんに話があるんだ。」

やっぱり嘘だったんだ…。

この時点で会長に対する信用はゼロ。

たとえ頼み事だったとしても、突っぱねる気満々だ。

「幸田君が停学から復帰したら怖いでしょう？
僕が君を守ってあげるよ。」

だから、僕と付き合ってくれないかな？」

え！？告白！？

嘘だ！？絶対この人、私に好意を持っているわけじゃない。
あっさりしすぎてるし、何か企んでる感じが、やっぱり目からうかがえる。

「…ごめんなさい。私には好きな人がいるので、それに応えることは出来ません。」

それに、酷いことを言うようですが、会ったばかりの他人の『守ってあげる』なんて言葉、信用することなんて出来ません。」

実際は、会長自体が信用できないんだけど。
これで諦めてくれないかな…？

「ずいぶんと簡単に拒絶するんだね。」

それに、相手の本気を疑っちゃあいけないよ。」

油断ならない笑顔でそう言われて、少し…いや、かなりムツとする。

「…何が本気ですか！からかってるようにしか感じません！

大体、嘘を吐いてこんな、本当に誰も来ないような所に女の子を連れ込むような人の何を信じろというんですか！

何が目的なのか知りませんが、諦めて下さい！！」

私のその返答を聞いた瞬間、会長の笑みは歪んだ笑みになる。

「……クツ、ハハハ。か弱くて鈍そうにみえて、なかなか鋭いじゃないか。

だが、これは予想できたかな？」

そう言って、会長は、袖の下から、サバイバルナイフを抜き出した。

「…ひっ！…！？」

「お前に『断る』なんて選択肢はねえよ。
死にたくなけりゃ、黙って俺の言うことをきいとけ。」

最早、会長の顔は誰が見ても残忍な表情に見えるようなものに変わっていた。

——怖い、けど…嫌だ！

「…なぜ…わ、私があなたの彼女になることを、望むんですか？」

「そんなの簡単な話だ。

今まで誰が告白しても断り続けている『男嫌いの美少女』と名高いお前の彼氏になったら、俺は今より更に有名になれる。

それに、お前はあの天崎の会社の社長令嬢だ。これほどの優良物件を、逃す手はねえだろ。」

この人も、私を物としか見てない…！

「…要するに、私はあなたの名声の為の道具になる、ってことですか…？」

「そーゆーことだ。」

会長は、歪んだ笑顔を深めて即答する。

私は、いつのまにか壁に追いやられていた。
後ろは壁、前には凶悪な天敵。おとこのひと

——逃げられ…ない…？

「…さて、お答えは？」

——もう嫌あ！！

「嫌！！絶対に嫌あ！」

何で、私ばかりこんな目に遭うのよあ！！」

突然の私の叫びに、会長が怯む。そして、その顔が怒りに歪む。

——っ！

逃げなきゃ！どうしようどうしようどうしよう！？

咄嗟に、会長の左側に注目する。

「っさ、沢村先生！助けて！」

「っな、何っ！」

会長が驚いた顔をして、そっちを向いた。

その瞬間、私は逆側に全力疾走した。

激しい運動は控えなきゃいけないんだけど、今はそんなことを気にしてはいられない。

もちろん、こんな所に沢村先生なんていない。

咄嗟の思いつきで、さっきの放送に出てきた先生の名前を借りただ

け。

実際、そこにいたのはふつ々の三毛猫。

でも、逃げるには十分の隙が出来た。

「…なっ！？…クソッ！逃がすかあっ！！」

が、会長もすぐに気を取り直して追い掛けてくる。

すばしっこさには自信があった。小さな身体の数少ない利点だったから。

だけど、相手は身長が高いため、足も長く、リーチの差がかなり大きい。

それに、私は今、左腕を吊っていて、非常に走りづらい。

開いていた距離をあっと言う間に詰められる。

「うおらあっ！！」

真後ろで叫び声がきこえ、左肩に、突き飛ばされるような衝撃を感じ、私は転んだ。

突き飛ばされた所が、生温かった。

転んだ体勢のまま、後ろを振り返ると、会長の手には血まみれのナイフが握られていた。

それを見てやっと、刺されたことに気付く。

会長の目には、強烈な殺気のようなものが宿っている。

それを見てゾッとする。幸田君の時とは比べ物にならないほど怖かった。

「…ハハッ、逃げられると、何だか本能的に刺し殺したくなるんだよな。」

…でも、別にいいよな？俺の言うことを聞かない人間なんて、生きてなくても。」

そんな、勝手なっ…！

でも、今や感じ取れるほどになった殺気が、それが本気であることを証明している。

「…ひっ……たっ…助けて…誰か…」

頭がクラクラする…。

目の前の会長が、腕を振り上げる。

——嫌だ…。死にたくない…。

これから、『お姉ちゃん』になるのに…。

まだ…、まだ、勇君に、すき、って言っていないのに…。
嫌だ…！

「やめろっ！！」

——勇君…の声…？

「チッ！」

会長は、その声を聞いた瞬間、逃げていった。

「冬花！大丈夫か！？怪我は！？」

間違いなく、本物の勇君だった。
安心した途端、激痛が私を襲う。

「…う…か、肩が…」

酷い出血に、勇君も気が付いたらしい。

「…玲花！救急車を呼べ！！」

硬介！！赤黄を追いつけて捕まえてくれ！！」

「わっ、わかつ、たわ！」

「了解！！」

硬君は会長が逃げていった方向に駆け出し、玲ちゃんは、息を切らしながらも、ケータイで電話をかけた。

「…！！…！！…！！？」

私は、焦点の定まらない目で、勇君を見ようとしていた。勇君が何かを言っているのに、頭がぼーっとしてきていて、勇君の声を聞き取れなかった。

「…ありがとう、勇君…。」

自分の声も聞き取りづらくて、うまく言えていたかはわからない。

本当は、まだ伝えたい言葉もあったけど、その前に、私の意識は落ちていった…。

第十三話 女性な少年 想い人の危機

今回も若干、流血表現が入ります。苦手な方は、後半を読み飛ばしてください。

「勇兄！玲花！どうしたんだ？そんなに急いで。」

玄関前で、硬介と飯田さんに出会す。

飯田さんが、俺と玲花の様相を見てびっくりしてるが、いまはどうでもいい。

「硬介！お前、今、暇か！？」

「は！？いや、デート中だし、暇ではないけど？何かあったのか？」

「ちょっと、こーすけ兄！何で言っちゃうのよぉー！！／／／／／」

硬介、別にそれは言わなくてもいいよ…。

飯田さんもめっちゃ恥ずかしがってるし…。

「まあまあ飯田さん。聞かなかったことにしておくから落ち着いて

…。
って、そんなことよりも！またまた冬花がピンチなんだ！
しかも、相手はあの赤黄だ。本格的にまずい！」

「は？アカギって…信号機会長か！
…ったく！なんとって冬花は、そんな、悲劇のヒロイン並に不幸な目に遇いまくるんだ！？」

ヤツは、赤黄 青治という名前から、信号機というあだ名がついている。

やたらと地位や名声にこだわる、まるでベタな三流悪役貴族のような思考の持ち主で、さらに、欲しい物はどんなことをしてでも手に入れるという残忍で強欲な元不良生徒だ。

そんな不良が、何を思ったのか今年度の前期生徒会長に立候補し、どんな手を使ったのか、当選してしまい、今、生徒会長を務めている。

「冬花はヤツと体育館裏に向かったらしい。
赤黄のヤロー一人なら、俺だけで何とでもなるけど、複数いたらどうにもならないからな。
頼む、硬介。ついてきてくれ！」

本当は負ける気なんてしないけど、冬花救出のことを考えると、人手が足りなくなるかもしれないから、硬介も巻き込もう。

「…わかった。いこう！

すまん、夢菜。校内デートはまた今度…」

「わ、わかったからそれ以上言わないでえ！／／／／／
わ、私も先生方を連れて後で行くからね！」

真っ赤になりながら飯田さんは走り去っていった。

「よし、行くぞ勇兄！」

「お、おう！」

「ちょ、ちょっと、あたしを置いてくな！」

俺と硬介と玲花は走り出した。

「ところで硬介。いつの間に彼女つくったんだ？」

走りながら訊く。

玲花はもう、かなり後ろを走っている。流石、運動音痴。

「ああ、この前、勇兄を屋上に呼び出す前。

夢菜に告白された。

俺も、夢菜の事は気になってたから…。」

「へえ。…俺も冬花を助けたら、告白する覚悟を決めるか…。」

「そうしとけよ、勇兄。

…後悔しないうちに、さ。」

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

体育館裏に着いてすぐ、冬花を見つけた。

冬花の前で、赤黄が腕を振り上げた。その手には、真っ赤な何か握られていた。

「やめろっ!!」

大声で叫んだ。

「チッ!」

赤黄は、俺達を見てすぐ逃げていった。

「冬花!大丈夫か!?怪我は!?!」

冬花の目は、ぼんやりと宙を見ていたが、俺が声をかけたことで、はっと俺を見た。

その顔が、苦痛に歪む。

「…うつっ…か、肩が…。」

冬花は、また、血まみれになっていた。色の薄い綺麗な金髪も、今は所々が血で染まっていた。

玲花に救急車、硬介に赤黄の捕獲を頼んだ。

二人は、即座に動いた。(玲花は息切れしていたけど。)

俺は再び冬花を見る。

制服の肩の辺りが裂け、血が溢れ出している。ギプスも包帯も赤黒く染まっている。

一瞬、この前の傷が開いたのかと思ったけど、あの時、肩には傷はなかったはず…

赤黄の手にあつた赤い物を思い出した。

——まさか、刃物かつ！？

「硬介！気を付けろ！赤黄のヤツ、刃物もってる！」

遠くなった硬介の背中に大声で警告する。

「任せとけ！」

と、微かに返事が聞こえた。

冬花は、もう、目が虚ろになっていた。

「冬花！しっかりしろ！おい！」

「…あ、り…が…勇、く…。」

そう言って、冬花は目を閉じた。

「冬花っ！？駄目だ！！冬花！！」

「落ち着きなさい！」

勇希！アンタが取り乱してどうする！

とにかく、救急車が来る前にふうちゃんを校舎前に運ぶのよ！
まず、止血しましょう！」

「あ、ああ！」

とにかく止血して、冬花を抱きかかえた。身長や体格を考えても、
凄く軽かった。

それに、出血の所為か体温が下がってきているように感じる。

移動する途中で、飯田さんが河野先生を連れて追いついてきた。

どうやら、突拍子も無い話を信じて着いてきてくれたのは、この前
のことで冬花の運の無さを目の当たりにした河野先生だけだったよ
うだ。

だけど、校医が来てくれただけで十分だ。

飯田さんはいつの間にか集まっていた野次馬を追い払って道をつくってくれた。

救急車の入って来れる校舎前まで移動、止血してもなお止まらない冬花の出血を危ぶんだ河野先生が

「この前も大量出血したんだし、また大量に出血するのはまずいわ。最悪の場合、失血死やショック死することにもなりかねない…。」

と言った。

——冗談じゃない！！

なんであんなふざけたヤツのせいで冬花が死ななきゃいけないんだ！！

その後冬花は、先生の手によって応急手当が施され、救急車で病院へ搬送された。

第十三話 女性な少年 想い人の危機（後書き）

うつ…。

本格的にストックがなくなってきた。

十八話までは大まかな部分は出来上がってるけど、いつも手直ししながら投稿してるから…。

もしかしたら、そろそろ、一週間に二話ずつ投稿してたのを、一話ずつ投稿、にするかもしれません。

こんな話を読んでくださっている皆さんへ。そうなってしまったら、本当に申し訳ありません。

第十四話 女性な少年 病院にて…

今、冬花は手術中だ。

病院に着いたときの医師の話では、すでに出血が多すぎてかなり危険な状況だったらしい。

今、この場には俺と玲花、飯田さんと河野先生、駆けつけた紘さんと由美さんがいた。

まだ、手術中のランプが消えていないのに、医師が出てきた。

「済みませんが、どなたか、お嬢さんのご両親以外で血液型がO型の方はいらっしゃいませんか!？」

今朝方に起こった自動車事故で、輸血用のO型の血液のストックをほとんど使ってしまったて、足りなくなってしまうまして…!」

「そんな…! 家族内でO型なのはあの子だけなのに! 他にO型は…」

周りを見ても、全員が首を横に振っている。

…O型…?

そうだ! 冬花の血液型は俺と同じじゃないか!

「俺、O型です！限界まで使っちゃってください！」

「は、はい。分かりました。」

あと、できればもう一人、二人程いらっしやれば、彼に掛かる負担も減るのですが……」

と、言っても、このメンツじゃあもつけないだろうな……

「じゃあ、ボクの血も使って下さいな。」

と、その時。後ろからの声。

は！？

「うわっ！？美月！お前、どうしてここに！？」

後ろにいたのは、俺の妹、白金 美月だった。

顔は冬花と瓜二つ。だけど中身はなかなか変人。そっぴや、血液型も一緒だったか。

ちなみに、ボクっ娘なのは母さん（こっちも若干変人。）の教育の賜物だ。

「どうして、って……ふーちゃんが刺された、って聞いたからとんできたに決まってるんじゃないか。黒瀬ホットラインで。」

「は？黒瀬ホットライン？」

何言っただこの変人（妹）は？

「現場にいたこーすけ兄ちゃんからヨースケに伝わって、ヨースケから速報として聞いたんだよ？」

それが何故にホットライン？

…あ、ちなみに、ヨースケってのは、硬介の弟、陽介ようすけのことだ。

「あ、あの…、時間があまりないので、雑談はそのくらいにしてください。」

そのお二人でよろしいのでしょうか？

お二人ともO型ですね？」

「「はい！」」

この三時間後に、手術は成功し、冬花は病室に移された。

麻酔が効いているせいもあるだろうけど、まだ、冬花の意識は戻らない。

硬介からの連絡で、赤黄が逮捕されたことを知った。

罪状は殺人未遂らしいが、アイツの事だから余罪もボロボロと出てくるだろうと思う。

ついでに、この事件は後日、ニュースなどで結構大きく報道された。

* * * * *

警察で、目撃者として事情聴取を受けたり、いつも通りの生活にプラスして冬花の見舞いに行ったりと、忙しく一週間を過ごしたけど、その間、冬花は意識を取り戻さなかった。

そういえば、赤黄のヤツは他にも七件の通り魔事件と二件の窃盗事件を起こしていた事が発覚したらしい。

しかも、一件目と六件目の通り魔事件の被害者は亡くなっている。どんな判決が下ろうと、アイツが俺たちの前に再び現れる可能性は、限りなく低いだろう。

十日目の夕方、いつも通りに冬花の病室に入ると、由美さんが来ていた。

「あら、いらっしやい。いつもいつも本当にありがとうね。」

「いえ、そんな…」

俺は由美さんの隣、冬花の右手側に座る。

由美さんは、十日前に会ったときよりも少しやつれていた。

「冬花ちゃんね…こうやって、大量出血とかで体…特に心臓に負担ばっかりかけ続けてしまうと、あんまり長生き出来なくなっちゃうんですって…。」

体力はまあ有るほうなんだけど、元々が病弱だし、普通の人よりも体の限界は早く来るでしょう、って…。」

「…そんな…」

…どうしてだ？…どうして冬花ばかりがこんな酷い目に遇うんだ？

俺はどうしたらいい？俺は…

…そうか。

俺が…

「…俺が冬花を守ります。ずっと、ずっと…」

気付いたら、俺は冬花の手を握っていた。

そして、誓うようにその言葉を言っていた。

「え？勇希くん？」

「冬花が一人で苦しまないように、ずっと側で支え続けます。だから…」

そこで、病室に誰かが入ってきた。

「はいストップ。そういうことは、相手と、相手の両親がいるときに言うものじゃないかな？」

「「紘さん！？」「」

突然の紘さんの登場に、俺も由美さんもかなり驚いた。

「お仕事はどうしたんですか！？
今日は遅くなるって今朝、言って…」

驚きながらも、由美さんが紘さんに訊いている。

「元々、見舞いに来るつもりだったんだよ。だから遅くなる、ってね。」

僕の勘だけど、冬花はきっと、今日あたり目覚めるんじゃないかと思ってるね。」

「そうだったんですか。」

それなら今朝、言ってくればよかったじゃないですか。」

「そうまで言って来られなかったら冬花に悪いと思ってるね。」

…さて、勇希君。君は先程、冬花をずっと守り続けると言ったね。それは、冬花をどういう対象として言ったのかな？

可愛い妹分として？それとも、守ってあげたくなるか弱い女の子と

して？」

…違う。俺の気持ちは、そんなに軽いものじゃない。

「…いいえ。どちらでもありません。

確かに昔は、か弱い妹分と思っていました。

ですが今は、…愛しい女性として、冬花のことを想っています。
…いえ、もしかしたら昔からそう思ってたのかもしれませんが。気付いてなかっただけで。」

これが俺の、今の正直な気持ちだ。
なんだか相手側の両親に交際の報告に来た、みたいなシチュエーションだけど、肝心の冬花にはまだ伝えてないし、まだ意識が戻らない。

「そうか…そこまで言えるなら、僕達が言うことはないよ。
まあ、どうせ、肝心の冬花には、まだ何も言っていないんだろうけど？」

「…え！？気付いていたんですか！？冬花にまだ伝えてないって…。」

「僕を甘く見ちゃあいけないよ。

冬花や君を見たらなんとなくわかるさ。」

さすが紘さん。勘が鋭い。

「…僕としては、娘の親離れは寂しいものがあるけど、それでこの子が幸せになれるなら…。」

おおきく反対はしないよ。

まあ、あくまで、冬花が望めば、の話だけど。

…しっかりと冬花を振り向かせてね。僕が言うのもなんだけど、冬花は、なんとなくいまいち恋する、ということを知ってない感じだからね。」

「私も賛成ですよ。

がんばってね、勇希君。この子のために。」

「…ありがとうございます。」

そして、冬花の右手を少しだけ力を入れて握った。

…ピクッ

「え？」

「どうしたの？」

「今、ちょっと手が動いたような…？」

…きゅっ

「…！冬花？冬花！聴こえるか？冬花！」

俺は、一生懸命に呼び掛けていた。

すると、ゆつくりと、冬花の瞼が開いた。

「…勇…君…？」

来た時に紘さんの言ったとおり、冬花はその日の内に、目覚めた。

第十四話 女性な少年 病院にて…（後書き）

えと、まず最初に…。

ごめんなさい。

実はこれを投稿するちょっと前に、本日投稿する予定だった十五話に、設定との大きなズレを見つけてしまい、現在、内容を変更中です。

出来るだけ急ぎますが、今日中に間に合わないかもしれません。

第十五話 小さな少女 思い出の夢―出会い―

―何も見えない…。

―寒いよ…。

―痛い…よ…。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

私は、何かにしがみついていた。

（あれ？え？え？）

状況をサッパリ掴めない。

頭が勝手に上を向く。すると、いつもよりも高い位置にお母さんの

顔があつた。

私は、お母さんの脚にしがみついていたらしい。（脚に直接しがみついている訳じゃなく、長めのスカートにしがみついている。）

つづいて、周りを見回す（と、言うよりは、体が勝手に動いて、周りに目を向けている感じがする。）と、お母さんの横には、お父さんもいた。

そして、目の前には見覚えのある大豪邸。

どうやらここは勇君の家の玄関前らしい。だけど、なんだか多少の違和感がある気がする。

（私、どうして、お母さん達と一緒に勇君の家の前にいるんだろう？それに、なんだかいつもより視線が低いような…。）

お母さんに問いかけようとしたけど、声がでない。

（え？あれ？）

「どうしたの？怖いのか？」

大丈夫よ。冬花ちゃん。ここは何も怖いものなんて無いところよ。」

そう言つて、お母さんは私の頭を優しく撫でる。

『ホントに？おちゅーしゃとか、おいしくないおくすりとか、ない

『？』

（へ？な、何言ってるの、私？勝手に喋ってる？）

そういえばさつきから、体は勝手に動くし、口も勝手に動いていた。私自身は、体を動かせないし、喋ることも出来ない。

「ええ。みんな、優しい人たちよ。

冬花ちゃんがいい子にしてたら、お友達ができるかも？」

（…もしかしてこれ、夢？）

頭に浮かんだ疑問は、すぐに確信に変わった。

さつき感じた違和感は、現在の白金家との違いに因るものだと思う。

（随分とハッキリした夢だな…。それに、夢の中で夢であることに気付く、ってなんか変な気分…。）

そういえば、人間って、記憶の抽出ひきだしを開けられなくなってるだけで、実際は、殆どの出来事を記憶している、って聞いたことがある…。

（？てことは…、私は今、その抽出を開けて、夢で見てる、ってこ

となのかなあ。
）

多分、お母さんとの会話から察するに、この状況は、初めて勇君（みいちゃん）と美月ちゃん（みづきちゃん）に会った日のものだと思う。

『おともだち？わたしにも、おともだち、できるの？
じゃあわたし、いいこでいる！』

* * * * *

「あらあら、いらつしやい、由美ちゃん。」

出迎えてくれたのは、勇君のお母さん、リリーさん。

家政婦さんに連れられて、物凄く広いゲストルームに通され、部屋の中を見回す、今よりも更に小さい私。

ちなみに、お父さんは勇一郎おじさん（勇君のお父さんだよ。）と、別の部屋に行った。

『うわあゝ。おっきいゝ…。』

広さに驚く小さい私。

この頃は、確か、私は4歳だったはず。

私はあまり覚えてないけど、この頃の私は身体が小さくて、ひどく弱かったようで、ほとんど病院暮らしだったらしい。外出も、月に一日有るかどうくらいだったと聞いている。

医師の、そろそろ大丈夫、という判断で、退院したのが、この日の一週間前だったと、お母さんから聞いたことがある。
そのせいで、家、という広い空間に慣れていないから、小さい私はキョロキョロとしているんだと思う。

…視点が動きすぎて、夢の中だっているのに、乗り物酔いになりそうな気がしてきた…。

「さあさあ、ユウキちゃん、ミツキちゃん、いらっしやい。」

リリーさんが、勇君とみいちゃんの手を引いて、ゲストルームにやって来た。

それにびっくりした小さい私は、近くにいたお母さんのスカートにしがみつき、顔だけをひょっこり出して様子を見ていた。

「冬花ちゃん。怖がってばかりだと、お友達は出来ないのよ？それでもいいの？」

『…うつ…、ヤダ…。おともだち、ほしいの…。』

「そうでしょう？怖いのを我慢しなきゃいけないときもあるのよ。」

『うん…。』

《怖がるのは、本能的に身を守る為のことだから大切なこと。だけど、ときにはそれを堪えて乗り越えないと、欲しいと思ったものは手に入らない。》

これは、お母さんがいつも言っている、お母さん論。

臆病で、いろんなことを怖がる私にとって、この言葉はかなりグサツとくる言葉…。

…でも私、この頃から言われてたの？

「じゃあ、あの子達に挨拶しましょう？」

『うん…。』

そして、小さい私は恐る恐るお母さんから離れ、ゆっくりと勇君達の元へ歩いていく。

『…あのね、あの…。
はじめまして、あのね…わたし…ふゆか、っていの。
…おにいちゃんたちは、なんていうなまえなの？』

「えっ？」

小さい私がそう訊くと、勇君は、ちょっと驚いたように声をあげた。

「『おにいちゃんたち』って…。ぼくが男の子だって、わかるの？」

『？おにいちゃんは、おにいちゃんじゃ…ないの？』

この時、私は何の疑いもなく、勇君が男の子だと理解し、初対面で
『おにいちゃん』と呼んだ。

勇君の他にも何人か、女の人みたいな男の人や、男の人みたいな女
の人に会ったことがある。

直感力に優れている（らしい…）私は、そういう人に会う度に相手
の実際の性別を言い当ててきた。

だけど、全く疑わずに、寧ろ、そうじゃないとおかしい、と言う風
にまで感じて断定したのは、この、一番最初の…、勇君の時だけだ

った。

「由美ちゃん、この子にユウキちゃんの性別教えた？」

「いえ、教えてないですよ？」

「あらあら？じゃあ、初対面でユウキちゃんが男の子だってわかったのね。そんなの初めてだわ。」

「これは運命ね！由美ちゃん！この子、将来ユウキちゃんのお嫁さんにちょうだい！」

「そんなこと言ってたんだ、リリーさん……。」

良いことじゃないのはわかってはいるけど、それにすがりたい私もいる。

「二人が大きくなって、二人共それで幸せになれるって言うなら、私は賛成しますよ。」

「さすがお母さん。軽弾みでない慎重な答えだね……。」

リリーさんの言葉をあてにしたいかも、と言う私の思考を読まれた気分……。

と、そこで、小さい私の興味が目の前の二人に戻ったのか、母親達

の会話が聞こえなくなった。

『…ねえ、おにいちゃんたちのおなまえは、なんていうの？おしえて？』

「ぼくはユウキ、って言うんだ。でね、こっちがね、妹のミツキ。」

『ゆうきちゃんと、みつきちゃん？』

じゃあ、ゆうちゃんと、みいちゃんだね。
えっと、よろしく…ね。』

「うん。よろしく。冬花ちゃん。」

『うん！』

小さい私が笑顔で軽く頭を下げる。

特に意味はなかったんだろうけど、多分、小さかった頃の私が思いついた、精一杯の挨拶なんだと思う。

今でも、初対面の人に対して、自己紹介のあとに頭を下げる癖があるし。

それを見た勇君とみいちゃんも頭を軽く下げる。

小さい頃、みいちゃんは無口だったから、この日は一度も喋らなかった。

——あれ？…何だかボーッとしてきた…。風景も霞んできてるよう
な…。
フワフワするよう…。

『あのね、ゆうちゃん——』。

その言葉が、この夢の最後になった。

第十五話 小さな少女 思い出の夢―出会い―（後書き）

に…二週間も空けてしまったよ…。数少ない貴重な読者様方、誠に申し訳ございません。受験勉強の合間合間に執筆してたんですが…。その『合間』がないんです…。（泣）恐らく、次の投稿は三月頃になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9597c/>

小さな少女と女性な少年

2010年10月14日12時31分発行